
悪魔と天使におまかせっ

ししとう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と天使におまかせっ

【Nコード】

N9708C

【作者名】

ししとう

【あらすじ】

主人公藤堂真。彼は突然神界に迷いこんでしまった。そこで彼は悪魔と天使に出会う。ただ・・・その悪魔と天使は想像した悪魔と天使とはほど遠かった。

第一話〜悪魔の名はバンシー〜

悪魔あくまとは諸宗教に見られる、“煩惱”や“悪”、“邪心”などを象徴する超自然的な存在のことだ。

空想の中では黒い姿で角があったり、体より大きな羽が生えていたり、見るからに悪魔だと思っていた。

そんなんだったら、どんなによかったか・・・。

第一話〜悪魔の名はバンシー〜

ここは季節がない街。

季節が変わらない街。

季節は神様の気分しだい。昨日は夏だったのに、今朝には冬になっ
ていたりとでたらめな季節。

街の名前は“トロイメライ”。変わった名前なまえの街だ。

外装は何の変哲へんてつもないただの街だ。

俺の名前は藤堂真とうどうまこと。ごく普通の学生だ。

いや・・・だった・・・かな？今となっては。

はあ・・・。俺がため息をつくのも無理はない。俺はちらつと俺の部屋をたつた数分で自分の部屋のように居座っている少女を見た。少女の名はバンシー。バンシーは、美しく艶やかな長い黒髪に似合わないほどの小さな背丈。肌は触れれば溶けてしまいそうな雪のように白い。見た目だけなら可憐な少女。

その肌に合うつり目がかった赤い宝石のように輝いた大きな瞳がこちらを見る。

「なに？」

「いや・・・なんでも・・・」

「そっ?」

ぱつと見は、聞こえたら確実にやばいと思うけど……小学生? カーン。

頭の上から突然タイヤが落ちてきた。

な、なんて……べたな……

しかし衝撃はテレビでみるよりも遥かに高い。

「な、なにすんだ!?!」

「私は小学生じゃないの! あんたよりも100倍は生きてんのよ!?!」

少しは敬意を持ちなさいよ!?!」

そう。こいつは小学生のような身なりだが、小学生じゃない。

こいつは、“悪魔”だ。

こいつと出会ったのは本当についさつき。

俺はいつもの通り家に帰っていた。

今日の季節は秋。

秋と春は結構好きな季節だ。

半袖でも長袖でも行動できるから楽でいい。

帰り道は、いつもより少しだけ暗かった。

でもそれは俺の気のせいだと思い、何の関心もなかった。ただ……

・うつすらと闇が気になった。

目の前には果てしない道。

ここはいつも通る道。ここ、こんなに長かったっけ?

今思えば止めておけばよかったとひたすら後悔。

俺は闇の中をゆっくりと進んでいった。一歩一歩ゆっくりと。

コツ、コツ、コツ。

革靴の音が妙に響く。

コツ、コツ、コツ。コツ、コツ、コツ。

もうどれだけ歩いただろうか?

30分は歩いたと思う。

「おかしいな・・・もう家に着いてもいい頃だと思っただけだな」
独り言も増えてきた。

少しでも恐怖を誤魔化すために。

『くすくす・・・』

びくっ・・・

少女の笑い声が聞こえた。

周りを見てみたが、周りには誰もいない。

それどころか

「ここは・・・どこだ・・・？」

俺は気づかなかった。周りの景色が見たこともない植物でいっぱいだったことに。

街には植物は育たないはずだ。

育つとしても、ビニールハウスの中などと空調を調整できるような施設がないと無理だ。

ここは外。無理だ、絶対に無理。

植物が育つわけがない。

『不思議？』

また声が聞こえる。

「ああ・・・」

俺は声に答える。

『くすくす・・・』

声はまた笑う。

なんなんだ？ この声は？

俺の恐怖から生み出す空耳か？

『違うわよ。私の声よ、私の』

声が急に近づいてきた。

「ど、どこだ！」

「ここよ」

声はするのに姿が見えない。

俺は周りを見渡してみる。

上、右、左、後ろ。全部見てみたが、どこにも、誰もいない。

「あんた・・・ワザとやってんでしょ・・・ふん!!」

「ゴキ!!!」

「ぐほっ!!!」

下から伸びてきた小さな手が俺の首を、無理やり顔を下に向けさせた。

俺が下を見てみると、小さな少女がいた。

うん。気づいてたよ。

でもね・・・気づきたくなかった。・・・うん。

「君・・・誰？」

「バンシー」

俺の問いに少女は高飛車な声で答えた。

俺の首につかまりながら。

「バンシーちゃん？」

「とりあえず首から手を離してくれるかな？」

「嫌」

俺の首にぶら下がりながらバンシーは言う。

「なんで!?!」

「なんとなく」

なんとなくで人の首にぶら下がるのはどうだろうか？

「ああ・・・もういいや」

バンシーは飽きたのか、俺の首から手を離してくれた。

俺は首に手を当てて少し首を慣らす。

「くすすす・・・」

バンシーは笑う。

「さつきから何がおかしいんだ？」

「だって珍しいんだもん」

「何が？」

「“人間”」

今こいつ、何言った。人間？

おかしなことを言うもんだ。お前も人間だろうに、人間が珍しいとは。

「私人間じゃないわよ。」

「は？」

決定だ。こいつは頭のおかしいやつなんだ。うん。

「だから違うつて言っつてんでしょ!!!」

「はいはい。……ん？」

俺……今口にしたっけ？こいつが人間って？

「ああ、私、人の心が読めるから」

「ああ……そう」

「……あれ？」

「あれ……!!!」

「うるさ……!!!い!!!」

えいつ!」

カーン。

「痛っ」

空から大きなタイヤが落ちてきた。

……なんで？

「で……あんた何者？」

「くすくす……知りたい？」

「いや、そこまでじゃ」

「えー知りたいよね」

「だから……」

「……!!!」

後ろ……!!!」

バンシーがいきなり大声を出した。

俺が後ろを振り向いて見ると、さっきの植物が巨大化していた。

さっきは気づかなかったが、植物はオジギソウを巨大化したような形で、表面には胃液のように強力な酸の液がにじみ出していた。

「何だ・・・コレ・・・」
ドスン・・・

腰が抜けた。腰から力が抜けた。
情けなく、惨めに尻餅をついた。

「ちよつとしつかりしなさいよ!!」

バンシーの声が聞こえる。

俺がバンシーの方を見てみるとバンシーに大きなコウモリのように黒い羽が生えていた。

悪魔・・・

俺は理解した。人間が珍しいと言ったバンシーを。

悪魔なんだ。

会う前からその姿だったら、俺はすぐに逃げ出した。

面倒ごとはごめんだから。

「逃げなくてよかったわね。」

もし、逃げてたらあんた死んでたわね」

怖いことをさらつと言うな。

「や、やっぱり?」

「うん。」

まあいいわ・・・這いずつてもいいから少し下がってなさい」

俺は腕の力だけでバンシーたちから離れた。

バンシーは巨大な植物と向き合っているというのに、眉ひとつ微動だにしない。

怖くないのか?

「・・・慣れてるからね」

「え・・・」

「きやははははは!!!!」

馬鹿バンシー!! 今日こそ決着をつけーるのよ」

植物の上にバンシーと同じくらいの背丈で、青空のような色をした肩にかからないほどのショートカットの少女が立っていた。

その少女の肌は、白い肌を仄かに彩っている茶色が夏を想像させ

る。

その小麦色を映えさせる向日葵のように黄色い瞳がバンシーを睨みつける。

「またあんた？」

単細胞のソフィエルちゃん

「誰だ単細胞じゃあ！！！」

「あんたしかいないでしょうが」

「くぬぬぬぬ……」

馬鹿って言う方が馬鹿なのよ！！」

「私は馬鹿だなんて言っていないわよ。」

っていつか先に言ったのはあんたよ、あんた」

「うぬぬぬぬ」

あれ？

恐怖は？

あ、腰が動く。

俺は立ち上がった。

「あ、大丈夫？」

「あ、一応」

「そ」

俺は巨大植物の上にいる少女に指さし、

「あれ誰？」

「私にちよっかいをかけてくる単細胞」

「あ、そう」

「ちがーう！！！」

俺に指を指された少女は足をじたばたさせながら大きな声をだした。

「僕は超最強天使ソフィエルさま。」

以後よろしくしなさい。その人間」

「天使？ あれが？」

「一応」

「一応って言うな!!」

俺の知ってる天使ってのは・・・もつと神々しくて、白い大きな羽が生えてるようなイメージだったんだけどな。

「子供みたいだな」

「むきーーーーっ!!!」

あんたより100倍は生きているこの僕に向かって子供ですって・

・

今日はあんたを溶かしてあげるわ。

行きなさい!! ルリー!!!」

ソフィエルの声と共に、植物が大きくうねり始めた。

うねりが止まると植物は一直線にこっちに向かって酸の液を飛ばした。

「うわっ!!」

「動かないで!

無より有を・・・」

俺は目をつむった。

じゅっう・・・

何かが溶ける嫌な音が耳を支配した。

あ、死んだ。

そう思った。

「大丈夫よ」

「え・・・」

バンシーの声が聞こえた。

俺はゆっくりと目を開けた。

目の前には黒い大きな壁があつた。

「なんだ・・・これ?」

俺が黒い壁を触ってみると。

ぶよん、ぶよん。

黒い壁はゼリーのようにぶよんぶよんと揺れた。

しばらくしたら壁は溶けるように崩れ落ちた。

「なんだ・・・いつたい？」

「どお？ 驚いた？」

崩れた壁の先にバンシーがこっちに手を振りながら立っていた。

「もう邪魔すんじゃないわよー!!」

「あんた・・・分かってる？」

バンシーの口調が変わった。

「な、何をよ・・・」

ソフィエルもそのことに気づき少し戸惑っている。

「人間に手を出したってこと」

「あ・・・」

ふ、ふん！ それがなんだってんのよ!!!」

「人間に手を出してはならない。」

それが悪魔だろうと天使だろうと関係ない絶対のルール。

あんたはそれを破ってしまった」

ソフィエルの体が震え始めた。

恐怖でがちがちに固まっている。

ソフィエルの震えが止まり、刹那。

「し、知らない知らない知らない!!!」

僕は悪くないもんね!! 悪いのはその人間。

勝手に神界に入ってきたのが悪いんだもん!!!」

駄々をこねる子供のように泣きながら叫び始めた。

神界？

なんだそりゃ？

「経緯はどうあれ、あんたは人間に手を出した。」

それは事実なの」

「どどどどど、どうしよう・・・」

「さあ？ 魔王さまと大天使さまに聞いてみないとね」

「ま、魔王さまと・・・大天使さま？」

「みーちゃった、みーちゃった」

男の声が脳に直接聞こえる。

「ま、魔王さま!!」

「この声の主は魔王だそうだが、俺は見たことがないが。」

「私も魔王さまを直接見たことなんてないわよ」

「え、バンシーも?」

「ええ。魔王さまはほとんど外にはいらっしやらないのよ。」

「ほとんどは神界の最深部の神魔界しんまかいにおられるのよ。」

「神魔界はあらゆる世界を見通せるの。」

「だからいちいち外にでる必要もないわけ。わかった?」

『説明ごくりうさん。』

「ま、そういう訳なんだよねん」

「すいぶんと碎けた喋り方をする人だ。」

「ぼ、僕は・・・どうなるんでしょうか?」

『抹殺!!』

「ええ!!」

「ソフィエルは魔王の声に大きな声を出した。」

『普通はな』

「へ?」

「今度は力が抜けるように啞然とした。」

「どういうことなんですか?」

「バンシーが魔王に問いかける。」

『俺の頼みを聞いてくれるなら、全てなかったことにしてやるよ』

「ほ、本当ですか!!」

「嬉々とした声を出すソフィエル。」

『おうよ。』

「大天使を探して欲しい』

「大天使さまを?」

「どうかしたんですか?」

『最近大天使のヤローを見ない。』

「で、久しぶりに神魔界の外に出るいいきっかけと思って外に行こ」

うとしたんだが、神魔界の入り口に大天使がしたとしか思われない
結界を見つけた』

「結界ですか？」

『大天使 夜露死苦』つてな』

「ふ、古いですね・・・」

『ああ』

魔王は呆れたような声を出した。

『大天使はコレを新しいって思ってるからな』

「結界は破れないんですか？」

バンシーが聞いてみると魔王は、

『無理』

即答。少しは悩めよ。

『で、姿までは確認できなかったんだが、人間界にいたことがわか
った』

「そういうこと」

『おっ、察しがいいな』

「まあ、悪魔ですから」

ああ・・・嫌な予感しかしない。
どうなることやら。

第二話 悪魔と天使と人間と (前書き)

主人公藤堂真。彼は迷い込んだ神界で小学生のような悪魔と天使に出会った。

天使ソフィエルが真の言葉に切れて、真を攻撃した。

しかし、それは悪魔と天使の掟を破る行為だった。

それを見ていた魔王が悪魔バンシーと天使ソフィエルに頼みごとをする。

それは真にとって嫌なことの前触れでしかなかった。

第二話　悪魔と天使と人間と

第二話　悪魔と天使と人間と

俺は恐る恐る手を上げた。

「あの魔王さん？」

嫌な予感するんだけど・・・

その大天使つて人が人間界にいるとするならさ、バンシーとソフィエルは人間界に行くってことになりますよね・・・」

『おっ』

「今ここにいる人間は俺だけですよね」

『当ったり前だ』

「このふたりが人間界に行くとして、滞在する場所はあるんですか？」

「ごくりと息を呑む俺。

息遣いさえうるさく聞こえるこの場。

バンシーとソフィエルさえもじっと魔王の言葉を待っている。

そして魔王が口を開いた。

『・・・・・・・・えへっ』

・・・・・・・・

「えへっ　ってなんだ！！！」

ま、まさか・・・」

『察しがいいな人間くん。』

そう、君の考え通りだよ。

バンシーとソフィエルは君の家に居候させてもらおうかと』

「そ、そんな・・・」

「そんなに落ち込むことないんじゃない？」

バンシーが俺の肩に手を置く。

その手を俺は振り払う。

むかついたから。

「ふざけるなよ！ 何で俺まで巻き込まれなきゃいけないんだよ！

！」

びき

バンシーの額に漫画だったら確実に怒りマークが10個は描かれたであろうほどの筋が浮かび上がった。

「あんたとつくに巻き込まれてんの！！ 諦めなさいよ！！！！」

「だからつてな！！」

『あーストップ、ストップ。』

バンシーも人間くんも』

「うるさいっ！！！！！！！！」

ふたりは頭に血が昇っているのか、話しているのが魔王というのも忘れ怒鳴った。

『一応・・・俺、魔王・・・な？』

「知るか！！！！！！」

『おいおい・・・』

「あの喧嘩はやめた方がいいんじゃない？

一応魔王さまの前だし。」

『一応つて・・・』

「分かったよ・・・」

「仕方ないわね・・・」

ふたりは話しているのが一応“魔王”ということに落ち着いた。

「それよりさ、人間くんつてのやめてくんないかな？

俺にはれっきとした藤堂真つて名前があるからさ」

「えっ・・・」

バンシーが誰にも聞こえないような声を発した。

『それもそうだな・・・』

名乗られたし・・・よし。

俺も名乗らせてもらおうかな？

俺の名はルシファー、魔王ルシファー様だ』

「ル、ルシファーー！！ マジでいたのかよ！？」

「何驚いてんの？」

バンシーは大して驚いていない。

が、俺はこれが夢であってほしいほど驚いている。

「当たり前だ！！」

ルシファーだなんてほとんど伝説なんだぜ？

まあ・・・悪魔とか天使とかも伝説なんだけどな」

「その悪魔とか天使とかの伝説ってなに？」

「え？」

バンシーは俺の伝説という言葉に驚いている。

ソフィエルも同じく。

「・・・・・・・・」

「そりゃ・・・大昔の人間が書いた聖書とかに書いてあるって話をどっかで聞いたことがあるだけだけど」

「なんだ・・・つまんないの」

俺の口から聖書という言葉が出たとたんに、バンシーの好奇心はどこかに飛んでいってしまった。

「あれ？」

『真。それは人間たちが勝手に書いた空想だ。

ま、アニメとか漫画みたいなものだ。

勝手に想像するのは自由だから。

俺たち悪魔や天使たちは名前とかを考えるのがすごい苦手で、

だからほとんどの悪魔と天使は人間が考えた名前を勝手に借りているわけ。

だから、名前が一致するだけ。

伝説とかそういうのはまったく関係ないんだ』

「マジで？」

『マジでだ』

伝説はただの作り話するのは分かってたけどこんな形で夢を壊さ

れるなんてな。

『話を戻そうか？』

大天使がいなくなっただのはかれこれ数百年前からだ・・・あ。

ちよつど真が住んでいる街、トロイメライの季節がでたらめになつてからだ』

「どういうことだ？」

この季節はトロイメライの中だけなのか？

全世界の季節がおかしいんじゃないかと、トロイメライの季節がおかしいのか？」

俺は街の外に出たことがない。

出る必要も無かつたから。

海もある。山もある。人もいる。ビルもある。何でもある。

だから街の外に出る必要がなかつた。

『ああ。その通りだ。』

季節を管理すべき大天使がいなくなつて、世界の季節がおかしくなつていった。

でも、そんなことは大天使ひとりいなくなつてもすぐに修正できるはずだつた。

だが、たつたひとつ特殊な街があつた』

「それが・・・」

『トロイメライだ』

「どういうことなんだルシファー！！」

『まあ落ち着け。』

なぜかこの街は天候を操れないんだ。

天候を操る天使、ファイブエンジェル 五大天使の力を持ってしても天候を操ることが出来なかつた。

ザキエルの嵐も、ストーム マルティエルの雨も、シャルギエルの雪も、スノー ラミエルの雷も。ライトニング

さらに、サハクィエルの晴天の空でさえ無効だつた。スカイ

こんな街は見たことがない。

天候を操れない以上、大天使に戻ってもらって季節全体を元に戻すしかない』

「季節が戻らないとどうなる？」

「この疑問がふつと浮かんだ。」

服装がめんどくさくなるだけで、大して困ったことはない。

だから、季節が元に戻ることに對して危機感を持っていない。

「あんな馬鹿？」

「何！」

バンシーが俺の方を向きながらこう言った。

『まあ・・・人間は目の前にある物事しか見ない生き物だからな。

説明してやろう。』

真は暑い所から急に寒い所に行くとうなる？』

「そりゃ・・・急な温度差で風邪でも引くんじゃないか？」

「正解。なのに何で分かんないの？」

ホント馬鹿ね」

「んだと？」

また真とバンシーはにらみ合う。

『まあ落ちつけ。』

その通りだな。風邪を引く、病気になるが正解だ。

それは生き物だけではない。“世界”も同じだ』

「世界が病気？んな馬鹿な」

「馬鹿はあんだ。」

また真とバンシーはにらみ合う。

『もうほつとくぞ？』

病気とは世界の崩壊のことだ』

「崩壊？」

『ああ。』

今まで世界は春、夏、秋、冬。

この季節の平行だった。

しかし今トロイメライの季節はめちゃくちゃだ』

「トロイメライだけなんだろう？」

世界じゃない。この街トロイメライだけだ。
なんてことはない」

『……すまん。俺たちは奇策を打ってしまった』
「奇策？　なんだよ……」

ルシファーは黙った。
いらいらする。

世界を知らない俺でさえ。
多数に裏切られた感だ。
俺は多数でいたかった。

安心するから。

その安心が失われたから、いらいらする。

「だまってないで答えるルシファー！！！！」

俺はこんな声を出せるのか。

怒気の籠った声。

ルシファーはやっと口を開きこう言った。

『世界はひとつになった。』

世界の名も決まった。トロイメライ “世界” という名に。

もはやこの街は街ではない。トロイメライ

トロイメライ 世界という世界になってしまった』

「やったって何を」

『元にあつた世界と世界を切り離れた。トロイメライ』

トロイメライ 世界を孤立させた。

そうすることで他の世界は平穏な世界になる。トロイメライ

トロイメライ 世界という犠牲の元に』

「俺たちは犠牲だつてのかよ！！」

『お前の憎しみも分かる。』

だがこれはあくまでも、世界のためなんだ』

「そんなこと知るか！！」

俺は目の前の世界に裏切られた。捨てられた。

魔王だかなんだか知らないやつらに……勝手に！

俺たちは犠牲にさせられた」

俺は空に向かい指を指した。

「お前たちに！！！ 世界に！！！」

「落ち着きなさいよ」

「うるさい！！」

「魔王さまの話最後まで聞きなさい」

バンシーが俺の方へと歩いてくる。

パン

バンシーの右手が俺の頬を叩いた。

俺は一瞬何が起こったのかを頭の中で考えた。

でもそれは意味のないことだった。

考えるより先に体が動いていた。

「何しやがるっ！！」

俺はバンシーの両腕を掴み、バンシーを怒鳴っていた。

「落ち着きなさいって言ってるのよ。」

怒鳴ることしか出来ないの？

最後まで聞いて、それでも納得できないのなら、

今度は私を殴りなさい」

俺は押された。

言葉にじゃない。

目だ。

バンシーの赤い瞳。

バンシーの瞳は何一つゆるがない。

気持ちも覚悟も。

安っぽい意地も何も無い。

本当にそうしろと言っている。

ごくり……

俺は何を恐れてるんだ？

俺のデメリットは何もないって言うのに。

何も知らない人形じゃあるまいし。

俺は世界と世界を知る必要もある。

犠牲になる理由も、犠牲させられた理由も知る必要がある。
権利がある。

「わかった……」

「そう」

『じゃ……話すぞ。』

俺は世界を見捨てたわけじゃない。

世界全体を救いたい、それだけだ』

「そのことと街を犠牲にすることと何の関係がある？」

「戻すためよ」

「何を」

「『世界を戻すため。』

平穩の世界を、偽りなき平穩な世界を』」

バンシーとルシファーは声をそろえてこう言った。

偽りなき平穩な世界を戻すためと。

それは今までの世界が偽りの平穩に包まれた世界というようなものだ。

俺は街にトロイメライずつといた。

世界を知らない。

友人はいる。家族はいない。

それでも平穩だった。

それが偽りだともいうのか。

信じるというのか。

悪魔と魔王の言葉を、

世界の真実を。

ここに来たのは本当に後悔の念だ。

が、聞きたい。知りたい。

世界を。

「今までの世界は偽りなのか？」

「ああ。

“箱庭”だ」

“箱庭”……。

世界にいる人間は、言わば箱庭の“人形”というわけか。

ルシファアの言葉はあまりにも残酷だった。

心に突き刺さる。

ぐさりと。

「が」

俺はルシファアの言葉に顔を上げた。

絶望から希望を見出したように。

「これから話すことはよく聞いておけ。

多分、お前にとっても、^{トロイメライ}世界にとっても大切なことだから」

「俺と世界に？」

「ああ」

「大天使だ。

人間界に堕ちた大天使サタンを探せ。

季節さえ元に戻れば、世界を元に戻せる」

「違う……」

「真？」

「それじゃ……駄目なんだよ。

俺は箱庭の人形なんか嫌なんだ」

そう、嫌だ。

世界を知って、箱庭を知っている俺だから。

「俺は嫌だ。

人形のまま死んでいくなんて。

俺は普通の世界で普通に人間として死にたい」

これが俺のただの願い。

こんな当たり前のことも出来ずに死ぬなんてのは嫌だ。

(真の気持ちも分かる。

が、こうしている間にも世界は崩壊している。

「……どうするか……」
ルシファーは考える。

真の協力なくしてはサタンを見つけるのは無理だから。
ルシファーが考えているとソフィエルが、

「だああああああ!!!」

奇声を出しながら急に立ち上がった。

ソフィエルの大声に真、バンシー、ルシファーは全員驚いた。

「ど、どうしたのよソフィー」

バンシーがソフィエルに声をかけた。

「どうもこうもないわ。」

真くん。

あなたねえ、死ぬのは悪魔も天使も人間も全員一緒なの。

天使に魂の善と悪を決められ、善の魂は天使と共に神界へと行き、
悪の魂は悪魔と共に魔界へと行く。

これのループ。

箱庭の世界も同等。

でもね、世界が崩壊したら意味ないの。

僕が言いたいこと分かる？」

「……」

真は急なことに言葉が出なくなっていた。

すると、ソフィエルが真の方へと空中に浮遊しながら近づいてきた。
た。

真とソフィエルとの顔の距離はほとんど零距离だった。

「分かる？」

「……はい」

にまりとソフィエルが笑った。

してやつたりの顔だ。

真から顔を離すとソフィエルは声高々にこう言った。

「はい！決定！真くんの自宅が、私とバンシーの滞在所！」

「……はあ。」

「この単細胞」

バンシーは大きくため息をつく。

『力技だなあ・・・ま、いいけど』
ルシファーは笑っている。

「・・・」

真は言葉が出てこない。

こうなることを予想していたとはいえ、呆気にとられている。
悪魔と天使と人間の共同生活がここに決定した。

第二話　悪魔と天使と人間と　（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
感想をいただけるとありがたいです。

第三話〜魔王から受け取ったペンダント〜

第三話〜魔王から受け取ったペンダント〜

俺の日常はいつ壊れた？

考えるまでもない。こいつらと出会ってからだ。

悪魔バンシー。

天使ソフィエル。

ほんと・・・後悔。

『ま、そういうわけで・・・いいかな真？』

ルシファアが俺にそう聞くが、白々しい心が丸見えだ。

「だめって言っても無駄なんだろう？」

『もち』

「はあ・・・」

「あんたも男なんだから腹くりなさいよ」

バンシーがそういうが、納得できないのが普通だ。

「ここに来た時点でもう普通なんて存在しないわ。」

トロイメランむしろ、街のほうトロイメランが異常なのよ。

天使の施しを受けない街なんて存在しないはずなんだから」

トロイメラン街は五大天使の力が効かない。

それは悪魔と天使たちにとって、ありえないことのようにだ。

『ま、そう気を落とすな。』

彼女たちは人間として君の家に居座る。食事とかも人間が食べる

ものを与えておけばいい』

「魔王さま、それじゃ私たちペットみたいなんですけど？」

『そうか？』

まあ、気にするな。

あ、そうだ』

ルシファアの声が止まった途端、青かった空が闇に包まれた。

「な、何だ？」

「俺の姿を見せるわけにはいかないんでな。少し暗くさせてもらっ
た」

何も見えない。

しかし、闇が闇を生み出しているのがなんとなくわかる。

「手を差し出してくれ」

俺はルシファアの言う通りゆっくりと両手をお椀のようにして目の前に差し出した。

「これをやる。」

ただでやるってのもなんだしな」

ぼんつ、と、手に何かを置かれた。

闇が晴れていく。

手に置かれたものは、濃く、深く、蒼い小さな宝石がついた小さなペンダントだった。

海・・・みたいだ。

ペンダントの輝きはまるで海だった。

1センチくらいの大きさの丸い宝石の中には海が広がっていた。

手を入れれば、その手は濡れてしまいそうな不思議な輝きだった。

俺は呆気と怒りが同時に消えてしまいそうな輝きにただ、見とれていた。

「これって・・・」

俺がルシファアが手渡したペンダントを空に掲げながら、その蒼い輝きを眺めているとバンシーが俺と目線が合うくらいまで宙に浮かびながらこっちに近づいてきた。

「な、なんだ？」

「ちよつと見せて」

「あ、ああ」

俺はバンシーにペンダントを手渡した。

バンシーは受け取ったペンダントを、俺と同じように空に掲げな

がらその輝きを確かめていた。

「……はい。」

少ししてバンシーは俺にペンダントを返した。

「どうかしたのか？」

「……別に。なんでも」

バンシーは少し顔を伏せ、俺に表情を悟られないようにした。

これ以上バンシーの顔を見るのは有意のないことだと思いバンシーから顔を背けた。

バンシーの変わった様子に心配そうな顔をしながら近づくソフィエル。

バンシーは顔を伏せたまま。

「バンシー……？」

「えいつ」

バンシーが指を鳴らすと同時にソフィエルの頭上から少し高い所にタライがとつぜん出現した。

タライは重力に逆らえずにソフィエルの頭に直撃した。

「痛っ！！」

からからと音を立てた後、タライは消滅した。

自分の頭を摩って今自分が何をされたのかをソフィエルは悟り、バンシーの服を掴み、

「何すんのよ！」

服を掴まれたままバンシーは、

「……硬い頭ね。」

羨ましいわ」

ソフィエルに対して皮肉を口にする。

ぎゃあぎゃああと騒ぐバンシーとソフィエル。

その脇で、俺はルシファーに聞いてみた。

「ルシファー。」

何だコレは？」

空に掲げ見せる物はルシファーに手渡されたペンダント。

『ただの宝石だよ。』

心配する必要はない』

「本当か？」

『もち』

本当に軽い言葉だ。

魔王というのはこんなものなのか？

もっとこう……

残忍で残酷で、人間たちを恐怖のどん底に叩き落とすような存在じゃないのか？

それはそれで困るが。

『さ、真と共にバンシーとソフィエルは人間界に降りてくれ』

「「わかりました」」

俺はまだ納得していない。

そんなことはこの悪魔と天使はお構いなしなんだろうね。

バンシーとソフィエルが俺の横に立つと、バンシーは左腕、ソフィエルが右腕をそれぞれ掴み歩き始めた。

その力を見た目とは違い男に掴まれているほどの力があつた。

俺はペンダントを首からかけ、バンシーとソフィエルと共に神界の入り口を出て行った。

（大変な探し物を頼んじまったけど、バンシーたちなら大丈夫だな。うん。）

真、ふたりのこと頼んだぜ)

ルシファアは3人の姿を見ていた。

これから始まる大変な出来事に魔王として出来る最後の手助けをして。

『頑張れよ』

ふっと魔王の声が消えていった。

第四話〜悪魔の杞憂〜（前書き）

この話には軽く血という言葉があります。
苦手な方は気をつけてくださいね。

第四話 悪魔の杞憂

俺は手をひかれ、どんどんと先へと行く。
歩くとか走るとかなら普通だ。

飛んでる。

俺はバンシーとソフィエルに手を引かれて空を飛んでいる。
神界というのは神隠しなどで人間が迷いこんでくることがあるらしい。

おそらく、俺もそうだろう。

しかし、帰るとなると神隠しでも帰れないらしい。

帰る条件は“空を飛ぶこと”らしい。

無論、俺は空なんか飛べない。

よってこの状況。

飛行機でいう左翼をバンシーがし、右翼をソフィエルがしてバランスを取りながら空を飛んでいる。

その高さは雲に手が届いてしまいそうな距離。

家やビルなどがジオラマに見えてしまう。

「も、もう街トロイメランだろ！」

降ろしてくれよ！！」

俺の肌には冷や汗がべつとりと付いて自分で触るのは嫌なほどだ。
それでもバンシーとソフィエルは俺を落としてはいけないと思っ
ていてくれるのか、しっかりと俺の腕を掴んでくれている。

そこにはもの凄く感謝している。

「あんたん家ちってどこ？」

バンシーが空を飛びながら俺に聞いてくる。

俺はバンシーの言葉に自分の家を探してみる。

しかし、こんなに高いとほとんどの家が同じに見えてしまいどれ
が俺の家かどうかわからない。

「もう少し低く飛んでくれねえとわかんねえよ」

「いつ?」

俺の体急降下!!

こんな高さを急降下したのは生まれて初めてだ。

急降下することにより発生する俺の体に対してのものすごい風。

防具を何一つ装備していないから、目がもの凄く痛い。

コンタクトをしている人は防具なしではバイクに乗れないそうだが、やっとその理由がわかった。

こんなのに耐えられる人間は存在しない。

「痛い!痛い!! ゆっくり飛べ!!」

「もう、わがままなんだから」

バンシーがそうばやく。

わがままとかそういう問題じゃないと思うんだがな。

それは口にしない。

バンシーは心を読んでしまうから仕方ないが、ソフィエルがどう思つかだな。

ん?

俺が下を見てみると、大きな長方形型の機械が見えた。

その周りには春に咲く花、タンポポやナノハナが小さく見えた。

その大きな機械は空調を調節できる“エアース”だと確認できた。

「おい、バンシー。ソフィエル。」

もう家は近くだ。ここで降ろしてくれ」

「わかった」

バンシーとソフィエルは俺の言葉にゆっくりと俺を地面まで降ろしてくれた。

俺が降り立ったところは、ノウルシ公園のようだ。

「ここってどこなの真くん?」

ソフィエルが俺に尋ねてくる。

俺は久しぶりにここに来て、少し懐かしさもあり、周りをしばらく見た後にソフィエルの問いに答えた。

「ここはノウルシ公園だ。」

俺の家の近くにある公園だ。久しぶりにここに来たな」

「何で街トロイメスライなのに植物が育ってるの？」

バンシーが公園に育っている植物に指さしながら俺に不思議そうな顔をして尋ねてきた。

俺も実際のところ詳しくわからない。

エアースが出来たのは俺が生まれてくる前だから、それはもうあって当然のものなんだ。

俺が何と答えるか悩んでいると、公園の大きな時計が目に入った。時間は俺が帰る時間とほとんど変わっていないかった。

俺が神界にいた時間は少なくとも30分はあつたはずだ。歩いてきた時間も30分。合計1時間。

時間が5分ほどしか変わっていないことに俺は驚いていた。

「あ、ああ。時間？」

バンシーは俺の考えを読んだのか、俺の疑問に答えた。

「あつちの時間とこつちの時間じゃ全然違うのよ。

それに、時間なんて悪魔と天使には必要ないもの。気にしたことなんかないわね」

面白くなさそうにバンシーは話す。

が、俺たち人間にとって時間は季節よりも大切なものだ。

朝起き、夜寝る。そのリズムを調節するための時間。それが悪魔たちには必要ないものなのか。

俺は改めて悪魔を知った気がする。

「まあいいわ。」

それよりも早くあんたん家ちに行きましようよ。近くなんでしょ？」

「あ、ああ。俺の家はこの公園のすぐ近くだ」

「それじゃ早く行きましよう」

ソフィエルが俺の手を取り、走りだした。

ソフィエルたちの力は男とほとんど変わらないため、俺は引きずられているかのようにだった。

「あれ・・・真ちゃん？」

影から少女の声がしたが、真たちは気づくことはなかった。

「気のせいかな？」

少女は気のせいだと思い、その場を離れていった。

俺がソフィエルに連れまわされて数分。やっとのことで自宅に着いた。

「こ、こんなに疲れたのは生まれて・・・は、初めてだ」

俺は自宅の前まで来ると疲れがどつと湧き出てきた。

「だらしないわね。こんなんで疲れて。」

はいはい。早く家に入りましょう」

バンシーは俺の疲れなんか軽く無視して、家に入ろうと俺をせかす。

俺は家の鍵をポケットから漁り、取り出した後家のドアの鍵穴に差し込みドアを開けた。

ここから最初になるわけだ。

俺、回想ごくろうさん。

バンシーは家のリビングの上にとかんと座っている。

ソフィエルは少し遠慮するかのようにちょこんと座っている。

ソフィエルの方が客としては正しい。

「お前も少しはソフィエルを見習え。お前は居候なんだからな」

俺がバンシーにそういうとバンシーは俺の横をすーっと素通りして2階へとあがっていった。

「おいおい。どこに行くんだ。」

そっちは俺の部屋が！」

バンシーは後ろ手に手を振りながら階段を昇りながら俺にこう言った。

「分かってるわよ。」

だから昇るのよ。」

バンシーはそういいながらどんと階段を昇っていく。
見られて困るものなど何もないが、女の子を自分の部屋に入れるのは少し気恥ずかしい。

俺はバンシーの横をむりやり通り、バンシーの行く手を阻んだ。

「だから見るなって」

「いいじゃない。」

私と真の仲なんだし」

「どんな仲だ」

俺とバンシーは今日、いや、さっき会ったばかりだ。

時間にして数分。そんな短い時間で深い仲になるわけがない。

「あっ！」

俺が少し考えている間にバンシーは、俺の脇をするすると蛇のように抜けていった。

「お邪魔しまーす」

そう言いバンシーは俺の部屋のドアを開いた。

俺はすぐにバンシーの後を追った。

俺の部屋は、部屋の隅の窓の傍に男一人分は余裕で寝ることのできる青いシーツに包まれたベッドに、そのベッドの横に使う予定もない勉強机。

そして、そのベッドの向かい側にはずらっと本が詰めこめられている本棚。本の種類は漫画がほとんどだ。

バンシーは本棚の横に無造作に置かれている赤い布に包まれている棒状のものを触ろうとしていた。

「触るな!!!」

俺は意識せずに叫んでいた。

俺はまだこだわっているのか。アレに。ただ、怖いだけなのに。

俺の叫び声にバンシーは、触ろうとした手を引っ込め、

「う、ごめん」

肩をすくめながら俺に謝った。

俺ははっとして、バンシーに何を言ったのかを思い出しすぐにこ

う続けた。

「お、俺の方こそごめん。急に怒鳴ったりして。

ちよっと下に行つててくれないか？」

「う、うん」

バンシーはそそくさと部屋を出て行つた。

俺はバンシーが階段を降りきるのを見届けると部屋のドアを閉めた。

そしてバンシーが触ろうとした赤い布に包まれたものを取り出した。

布に包まれていたものは、傷だらけの木刀だった。

その傷は少し古びていてもう何年も木刀に触っていないことが分かる。

俺は木刀の傷を指でなぞる。傷に沿い指を滑らせる。

木刀の傷跡の木の屑が俺の指から血を出す。

でも、痛くない。痛いと思わない。

赤い血はただ流れる。それが強い者だろうと弱い者だろうと。傷がつけば流れる。

俺は妙な考えを消すために木刀を赤い布に戻し、部屋の明かりを消して部屋を出て行つた。

リビングに戻つた後、俺はバンシーとソフィエルの寢床をどこにするかを話した。

「じゃあ、バンシーとソフィエルはこの空き部屋を使つてくれ。

他に必要なものとかあつたら言つてくれ。用意できるものだったら用意するから」

ここは、元々俺の両親が使っていた部屋だからふたり分のスペースは余裕である。

「えっ」

バンシーは心を読める。隠し事なんて意味のないことだった。

俺はふたりの顔を見ないように顔を背けて髪をぼりぼりと右手で

掻きながら、少しおどけるように話した。

「いや・・・なんだ。」

俺の両親・・・ふたりとも死んじゃってさ。なははは・・・」

「そう・・・なんだ」

バンシーの顔がうつむく。

何でバンシーは悲しそうなんだ？

俺だって悲しいわけじゃない。もう両親が死んで数年が経った。いい加減吹っ切れなきゃいけないんだから。

「ま、そういうわけだから。」

じゃ、仲良く寝ろよ」

俺は扉を閉めて部屋から出て行った。

「お休みなさい。真くん」

扉を閉める直前にソフィエルの声が聞こえた。

俺は腹が減っていたが今日はもう疲れたと思い、そのまま自分の部屋に向かい寝ることにした。

自分の部屋に入るとベッドに向かいうつ伏せにダイブした。

ギシッと、ベッドが軋む音が聞こえた。

今日はいろんなことがあった。

悪魔、天使に魔王。こんな1日で非現実なやつらに3人と会った。

世界を知った。断片ではあるが、俺は世界を少し知った。

箱庭。信じたくはないが箱庭。この世界は箱庭トワイライトだそうだ。

大天使がいれば世界は元に戻るそうだ。箱庭でもなくなる。

このことは悪魔と天使に任せておけばいいだろう。俺は何もせず、ただ傍観していれば。

瞼が急に重くなってきた。安心したのか、考え疲れたのか。この際どっちでも構わない。

俺はこの眠気に逆らおうとはせず、ゆっくり、ゆっくりと瞼を閉じていき、そのまま眠りについた。

第五話 悪魔と天使と幼馴染

朝。今日の季節は冬。

キンキンと冷えた空気が布団から出るのを拒ませる。でも出ないといけない。このまま入っていると、今日1日布団から出れなくなってしまう気がするから。

悪魔と天使が家に来てから、初めての朝。

家に2人も新たなる住人が増えたのだから、そこそこうるさくなるものだと思うっていたのだが。

今日の朝はやけに静かだ。妙だとは思ったが顔を洗うにも一階の洗面所に行くために階段に向かった。

俺はぼさぼさの黒髪を掻きながら階段を降りて行く。

「おはよう。バンシー、ソフィエル・・・あれ？」

リビングの中央にあるテーブルにバンシーとソフィエル。そしてもうひとり少女がひとり。

肩に少しかかるほどの赤みがあったオレンジ色の髪。黒すぎず白すぎない程よい肌色の健康的な肌。服の赤い裾からちょこんと見える指は絹の白糸のようにきめ細やかだ。

女性特有の発育は他の同性たちが羨むほどの大きさ。蒼い海のように深い輝きを持ったたれ目がかった大きな瞳。その瞳に合う緑色を縁取っためがねが彼女の頭脳の高さを表している。

彼女の名前は朝倉^{あさくら}さくら。俺の幼馴染だ。

幼馴染と言っても桜は5歳のころに近所に引っ越してきたので、俺とは5歳からの幼馴染関係だ。

「あ、おはよう真ちゃん。とりあえず座ってくれるかな？」

さくらの頬がぴくぴくしている。何やらご立腹のようで。

俺はさくらが怒ると怖いのを知っているのでさくらの言葉にすぐに反応し、バンシーの隣に座った。

「さ、さくらどうしてここに？」

さくらは黙って壁に張ってあるカレンダーに指さした。

今日の日付は……あ。

13の数字を囲うように赤いペンで丸付けされていた。その横に小さく『真ちゃんのご飯を作りに行く日』と書かれていた。

ちなみにカレンダーといっても1から30の数字が書かれているだけ。ここじゃ季節がでたらめだから、暦が決められない。

だから1から30の日にちを何度も何度も繰り替えすようになった。

「きよ、今日だっけ？さくらが来る日って？」

「そうだよ」

さくらの顔は笑っているが瞳の奥から微かに見える何かは俺を捉えていた。

「で、真ちゃん。この子たちは誰？」

さくらが笑顔で俺に尋ねる。

「子！？」

バンシーがさくらの、子という言葉に、バンシーの沸点が一気にあがった。

「な、なん」

「し、親戚の子だよ。親戚の」

俺はバンシーが何かを言うまえに言葉を遮り、バンシーたちを親戚ということにした。

俺の言い訳にさくらは首を傾げる。

「親戚……？」

親戚って真ちゃんのこと？」

「そう。そうそう、親戚。うん」

俺の見苦しすぎる言い訳をさくらが本当のことと勘違いしてくれるのを期待し、願う。

さくらはバンシーとソフィエルを交互に見つめ、それを何度か繰り返して、頷いた。

「分かったよ、この子たちは真ちゃんの親戚の子なんだね」

ふつと安堵。

さくらが頷いてくれて俺はホツとした。

バンシーの体がプルプルと震えてきた。

やばい、嫌な予感がする。

俺は本能でそれを感じた。俺は頭の中をこの考えでいっぱいにした。

(余計なことを言うな、余計なことを言うな)

ただ、それだけを考え、バンシーに伝えた。

バンシーの赤い瞳が俺をギロツつと睨みつける。怖いのは怖い。さくらを面倒ごとに巻き込むのはごめんだ。

(お前が子供じゃないのは俺が認めるから、今、さくらに余計なことを言うな。悪魔だったらそれくらい自重しろ)

俺の言い分にバンシーは不満足気な顔をしながらも軽く頷いてくれた。

ふたたび安堵。

するとさくらはピンク色のかばんから赤いエプロンを出して身に付け始めた。

「じゃ、真ちゃん。ご飯作ってあげるね。

バンシーちゃんとソフィエルちゃんの分も作ってあげるからね」

もうさくらの中ではバンシーとソフィエルは俺の親戚の子供になっっているようだ。

「私のことはバンシーでいいわ」

「僕の場合はソフィーでいいわよ。あ、真くんもソフィーでいいからね」

「分かった。バンシーにソフィーね」

何とか丸く収まったか？

さくらは台所に向かい、手を洗って冷蔵庫から昨日桜が入れていた食材を何種類か出し始めた。

「真ちゃん。朝だし、軽いものがいいよね？」

「ああ。簡単なもんでいいぜ。俺は顔洗ってくるわ」

俺は顔を洗うために洗面所に向かった。

「あ、真くん。僕も一緒にいくよ」

俺の後ろにソフィーが付いてきた。

冬の冷たい空気にキンキンに冷えた水が肌にしみる。

「さ、寒っ・・・」

だから冬は嫌なんだよな」

「はい、真くんタオル」

ソフィーが白いタオルを差し出してきた。

「さんきゅ」

俺はそれを受け取り、濡れた肌をくしゃくしゃ拭き始めた。

「・・・あ・・・ん」

ソフィーが俺を何度か、ちら見してきた。俺はそれを気づかないふりをする。

言いたいことがあるなら自分の口で言えばいいのに。

顔を拭き終わったタオルをかごに入れ、洗面所を出て行こうとする。

するとソフィーが俺の腕を掴んだ。昨日みたいに元気よくという感じではなく、どこかしおらしい感じで。

「な、何だよ？」

俺はソフィーの少し女の子っぽいその仕草に少しドキっとしてしまふ。

ソフィーは黄色い瞳を上目使いで俺を見つめ、また顔を伏せ。その繰り返しを何度繰り返し返したか、顔を伏せているときに息を吸い込む音が聞こえた。

「・・・なんでもない」

また顔を伏せ黙った。

ソフィーは一体俺に何を言いたかったのだろうか？それとも何も言う気はなかったか。

ソフィーは俺の顔を見ないままリビングの方へと向かっていて、もうそれを確認することは出来ない。

ただ、ひとつわかることがある。

それは、俺が知っている馬鹿で単細胞で明るいソフィーとは全然違う女の子だった。

「はいっ」

とテーブルの上に差し出される料理はこんがりと焼かれていい匂いが漂う焼き魚、漬物は3種類。味噌のいい匂いがする味噌汁。湯気がたち熱々のご飯。そしてその横には卵と納豆と海苔。

これだけを見るととても簡単そうなのだが、1品1品がとても丁寧に盛り付けがされていてどこかの料亭の朝食という感じだ。

さくらは俺のところを皿を並べた後、バンシー、ソフィーという順番で並べてさくらはエプロンを外して俺の隣に座った。

「じゃ、真ちゃん。どうぞ召し上がれ」

「おう。じゃ、いただきます」

まずは炊きたたのご飯を口に頬張ってみる。米を噛んでみると米の一粒一粒がとても甘いということがわかる。ここまで甘いと今度は塩気が欲しくなる。今度は味噌汁を口に流し込む。適度な塩気が口の中に広がる。

今度は漬物。シャキシャキとした歯ごたえが柔らかいご飯にとてもよく合う。

「今日のご飯はどう真ちゃん？」

さくらが顔を覗き込みながら俺に聞いてくる。そんなさくらの顔も最近ではほとんど毎日見るようになった。

最近ではさくらは毎日俺の家に朝食を作り来る。別に迷惑ということはない。ただ

さくら自身が迷惑ではないのだろうか。こんな俺ひとりのために飯を作りに行くのはどうだろう。こんな日が続いたのにも俺の安易な一言から始まった。

それは本当に何気ない一言だった。さくらがたまたま家に来ていて腹が減っていた俺に飯を作ってくれて、それが凄く旨くて『これ、

旨いな』って。

別に普通の言葉だったと思う。でもさくらは凄く顔を赤くして『だったら真ちゃん朝ごはんは私が作ってあげるねっ』って。それからほとんど毎日飯を作りに来てくれるようになった。

「のろけ？」

俺の考えていることをバンシーに読まれ俺は顔を赤くしていく。別にのろけているわけじゃないのだが、何だか気恥ずかしくなり顔を赤くしてしまった。

バンシーは俺の考えを読めるのだからこれがのろけじゃないことくらい分かるのだろうが俺をからかうためにワザとのろけと聞いてきた。

バンシーのペースにはまってしまっってはもうどうしようもない。

「馬鹿！ ち、ち、ち、ちげーよ！！」

俺は少し声がどもってしまったが違うという言葉を最後まで言えたことに安心した。

「ふーん・・・」

バンシーはそんな俺を見ながら少し嘲笑気味に俺を笑った。

俺はこれ以上墓穴を掘るのは嫌と思い目の前にある飯をかきこんだ。

第六話　悪魔と蜘蛛

飯を食べ終わり、さくらが食べ終わった食器を洗いながら俺にこう言ってきた。

「真ちゃん。そろそろ学校に行く用意をしないと学校に遅れちゃうよ」

俺がさくらに言われ時計を見てみるとそろそろ出ないといけない時間だった。

「あ、それもそうだな」

俺は部屋に向かい用意をしようとしていた。するとバンシーが、「今は・・・だめ」

妙に真剣な顔つき。あの顔を俺は一度だけ見たことがある。

ソフィーが悪魔と天使のルールを破ったときの顔だ。その顔は幼い容姿など軽く無視して、少女でありながらも凜々しい雰囲気を出している。

俺は少し圧倒されそうになったが地に踏ん張り、その雰囲気にもまれないようにした。

「な、何でだよ・・・」

少し情けない声になってしまったが声を出すことは出来た。

「・・・来て」

「あ、おい」

俺はバンシーに手を引かれて階段を昇っていった。

バンシーに連れられてこられたのは俺の部屋だった。

「な、何なんだよ」

「あの子に・・・」

あの子に面倒事はかけたくないんでしょ」

「あの子って・・・さくらか？」

ま、まあ・・・確かにそうだが。でもそれとここに連れて来る理由とどう関係あんだよ？」

何だろっこの不安　不安。

心臓が鼓動を早める。胃がキリキリ痛む。

こんなことをどこかで体験したことがある気がする。

もうずっと前に。嫌で嫌で記憶から抹消してしまった体験のような記憶。

これ以上ここにはいたくなかった。思い出してしまいそうで。

「来る！」

バンシーの声と共に目の前、窓のところに黒い、手で包み込めるぐらいの穴が開いた。

ガラスが割れたわけでもない。開いた。

そこから、にゅっと過剰なほどぬるぬると透明な粘液が付着している蜘蛛の足のようなものが出てきた。

その大きさは通常の蜘蛛よりも10倍、いや、へたをしたらもっとかもしれないがそのくらい通常ではありえない蜘蛛が出てきた。

しかもただの蜘蛛ではなく背中には大きな黒い羽と振り下ろせばなんでも切り落とせそうな鎌のような足が2本ほど蜘蛛の足と化していた。

『・・・ケケケ。ナンダココハ

ズイブントマア、セマツチイヘヤダネエ』

蜘蛛の口から人間の言葉が発せられた。

少しキーの高いその声は変声機を使ったかのような不気味な声。

俺は言葉を発する蜘蛛に対し、恐怖しか感じられなかった。

な、何だ・・・こいつは・・・

お、俺は・・・し、死ぬの・・・か？

俺はここから逃げ出したい。一目散に逃げ出したい。

「あ・・・ああ・・・」

俺の口から発せられる声は乾いた言葉だけ。

俺は叫び声を上げることさえ出来ない。

「落ち着きなさい。私がいるわ。だから・・・ね」
バンシーの手が俺の頭の上に乗る。

腰をから力がへなへなと抜けて、俺はその場に座り込んでしまっ
た。

恐怖から力が抜けたのか 安心して力が抜けたのか。

俺は後者だと思う。俺はバンシーに手を置かれて安心した。

「真はここにいて。私はあの蜘蛛をどうにかするから」

俺はバンシーの言葉に頷く。

バンシーは俺から手を離すと蜘蛛の方へと近づいていった。

そして蜘蛛に対しまず一言。

「その変な喋り方やめなさい」

「……つまらないですねえ。まあいいです。貴女がバンシーさ
んですか？」

蜘蛛の喋り方はどこか紳士っぽい。

「そうって言ったら？」

どうせあいつでしょ？」

あいつ？ あいつって……誰だ？

「分かっているのなら話は早いです。どうか許可を」

蜘蛛の姿をした何かとバンシーは話を続けている。

俺は何か不思議な感覚だった。いい感覚じゃない。嫌な……そ
う。嫌な感覚だった。

不思議な疎外感。仲間はずれとかそんな感じじゃない。でも疎外
感が強い。

何も俺には関係ないのかもしれない。でも嫌だった。

「私はいつが嫌いな。そう、嫌い。」

だから嫌。そんなことくらいわかりなさいよ」

「ですが、私としても手ぶらでは帰れないのです。なんとしても貴
女に来ていただきたい。」

たとえ 』

蜘蛛の瞳が俺を捉えた。俺は蜘蛛に睨まれ動けなくなってしまっ
た。まるで蛇に睨まれた蛙だ。

俺は蛙を笑っていたが本当に怖いと睨まれるだけで動けなくなる

ものだな。

『貴女から大切なものを奪ってでも!!』

蜘蛛はその身を俺の方に投げ出すように飛び掛ってきた。そしてその鎌のような足を振り上げ、俺を切りつけようとする。

「待った」

蜘蛛の前にすつと伸びる黒い影。

影の正体はバンシーの伸ばした手に持たれていた夏の日によくお世話になるもの。殺虫剤だった。

「ま、聞きたくないよ。あんたごときが私から大切なものを奪うなんて・・・さ。

でもね、奪うって言ったんなら私はあんたを許すわけにはいかない。だってそうでしょ？

大切なものってのは・・・大切だから。失いたくない、生きるためのものだから」

『そんなもの私には効きませんよ？

私は悪魔だから。虫の姿をしていても・・・ね』

バンシーが殺虫剤のスイッチを入れた。殺虫剤は霧のように薬品を蜘蛛めがけて放出する。

霧の中から蜘蛛の鎌の足が一閃、二閃。

その霧を振り払うように鎌が振るわれた。霧はその鎌に拒絶されるかのようにどんと晴れていった。

『ね。言ったでしょ

私にはそんなもの効きはしませんよ』

「そうね。

でも遅かったわね。もうおしまい。

無より有を・・・」

蜘蛛を覆うように黒い物体が蜘蛛を取り囲む。俺はその黒い物体を知っている。

ソフィーとの時に見たゼリーののような物体によく似ている。

『・・・何の真似ですか？

貴女のしたいことがよくわかりませんが？

この物体は魔界の黒曜魔石を利用してものようですが、そんなもの魔界の生き物である悪魔にとっては何のこともありません」

蜘蛛はバンシーを嘲笑し、鎌を振るう。

一閃。

二閃。

三閃。

「！！！」

ど、どういうことです。私の鎌が効かない！！」

蜘蛛は何度も鎌を振るう。

一閃。

二閃。

三閃。

蜘蛛を包み込んでいる黒い物体は蜘蛛の鎌の衝撃を吸収し、緩和している。

「あなたには罪はないし、あなたはまだ子供。

だからあなたをもう一度魂にもどしてあげる。あなたは運が悪か

っただけ、きつと・・・きつと次は・・・大丈夫だから」

蜘蛛を覆っている物体にバンシーのたおやかなその指が触れた。

触れた指先から黒い光が黒い物体を包み込んでいく。その光景は

不謹慎かもしれない。でも・・・綺麗だった。

何だろっ黒い光の中には点々と白い光が見え、冬空に輝く星のようだった。

黒い闇は蜘蛛を包み込んでいる。そして

シユンと、闇は消えた。

蜘蛛を包み込んだまま消えていった。まるで手品のよう。

あっという間に。まさにタネも仕掛けもなく、消えていった。

第七話 悪魔と魂

俺は消えていった闇が完全に消え去ってやっと動くことができた。その自分の情けなさに改めて痛感させられる。

俺はむくつと立ち上がり、バンシーに向かいさっきの蜘蛛について尋ねてみた。

「さっきの蜘蛛は・・・一体？」

バンシーは自分の胸 いや、心臓あたりを自分の右手で押さえながら少し顔が強張っていた。

「ど、どうした？」

「な、何でも。」

それより・・・あの蜘蛛だったわね。あれは低級悪魔よ」

俺は何でもないように話をするバンシーを見て、何だか少し複雑な気分になった。

そりゃ、俺とバンシーが会ったのは昨日のことだから親しくも何ともない。

でも何だか複雑だった。

でも今は好奇心のほうが強かった。俺はバンシーの話聞くことにした。

「低級悪魔？」

「そ。」

悪魔は2種類存在する。普通の悪魔と低級悪魔の2種類が」

「その違いって何だ？」

「魂は100年をかけて人の姿を模する。そこから悪魔か天使になるでも低級悪魔は・・・」

「低級悪魔は・・・なんだよ」

「魂のまま悪魔になる」

「魂のまま悪魔になると人の姿を模した魂が悪魔になるとどう関係あんだよ？」

気になった。その違いに、その理由も。

こんなことを知っても俺には殆ど関係ないかもしれない。

でも、何だろう。知らなくちゃいけない、知っていることに意味がある気がした。

「簡単よ。魂は脆く儂いの。」

魂は人間の赤ん坊よりもデリケートなの。触れれば壊れてしまうから。

1000年をかけ、人の姿にして、初めて魂は完全な魂となり悪魔や天使になるの。

そうしないと、悪魔も天使も自我を失い、ただ、何かを壊すことしか出来なくなる。それを魂が望もうと望むまいと。

でも魂は純粹なの。魂だから。悪や善は人の時の行いにより決まる。でも魂は違う。

すべてが同じで、純粹なの」

この話を聞き、俺は何を思った。

黙々と話すバンシーを見て、過去を思い出そうとしてしまった。

さっきの蜘蛛だって異様に恐怖を感じてしまっていたのだから。

あれは初めて見る恐怖じゃない。どこか、俺の生きている内のことかを感じたことのある恐怖　死。

それに似た恐怖だった。ここまで死の恐怖に似た感じのする恐怖なんてそうそう感じるものじゃない。

「考えても仕方ないわよ。今は大天使さまをさっさと探すことだけを考えればいいの。」

それからごちゃごちゃ考えなさいよ」

「・・・ああ」

俺はもう考えるのをやめた。なぜやめたかは、理由はひとつしかない。

これ以上足を踏み込めば俺は戻れないと思った。

足を踏み入れた瞬間、足を取られ、歩けなくなると思った。

この悪魔と天使のいる非日常に。俺は日常に身を置いていたかつ

だから。

そう願うことが俺の精一杯だったから。

第八話　人間と冷たい氷と

あの蜘蛛の姿を見てどれだけ時間が経ったのか俺は時計を見て確認する。

おかしい。あきらかに変だ。

時間がまったく進んでいない。

時計の電池が切れているのか、そう思ったが電池は昨日の朝には変えたはずだ。だから電池は新品同様なんだ。

だから時計が進まないわけがない。

「当たり前よ」

バンシーは毎度のごとく俺の思考を読み、俺の質問に答える。

「この人間界は魔界とか天界に比べたらものすごく脆い世界なの。

だから悪魔や天使みたいに人間から逸脱した能力を持った者が力を使うと時が止まるように魔王さまが世界を管理してるのよ」

俺はあの魔王を思い返した。

口は軽くともあの魔王は本当に魔王なんだと今、改めて思った。

「真ちやーん」

さくらの声の下から聞こえてきた。

時計の針も動き出し、また時が動き出した。

「時間は力がなくなると動き出すのよ」

戻ったのかと安堵する俺。

何をこんなに怖がっているのか。もうあの蜘蛛はいないんだぞ。

俺は俺自身に言い聞かせ落ち着こうとする。

なのに心臓は相変わらず早鐘を打っている。

このままでは自分の寿命が縮んでしまうのではないかと思うほど心臓は早鐘を打っている。

「真・・・変わった・・・ね」

「え」

バンシーがぼそりと呟いた。

俺はそれを聞き取れなかった。

俺はそれをもう一度聞き直そうとバンシーに声をかけた。

「今、何て？」

よく聞こえなかったんだが」

「別に」

そう言いバンシーはそっぽを向いた。

いったいバンシーは何と言ったのか、俺は気になった。

だからもう一度

「真ちゃん何してるの？」

バンシーに聞こうとしたのだがそこにさくらが入ってきた。

俺はまた心臓の寿命を縮めることになった。

さくらは俺とバンシーを交互に見つめながら顔がどんどん不機嫌になっていく。

こいつとの付き合いは昔からなので顔を見ただけで機嫌がいいか不機嫌かはすぐにわかる。

さっきの顔が上機嫌と言うならばこの顔は不機嫌だ。

俺はただバンシーと話をしているだけだったのだが体制が悪かった。

つい手を伸ばしていた。

バンシーの柔らかい腕をこの腕で掴んでいた。

さあ問題だ。これから俺はどうなると思う。

ぶるぶると肩が震えるさくら。ぶるぶると肩が震えるバンシー。

あれれ、よく似た反応ですね。

では正解だ。

「真ちゃんのばかー！」

まずはさくらの右手ビンタをまともに左頬に食らう。

音は痛快に鳴り響く。

「この・・・変態！」

バンシーが指を鳴らすと俺の頭上から大きなタライが落ちてきた。それは昨日落ちてきたタライの2倍ほどの大きさはあった。タラ

イに大きさなど関係ないと思っていたが、俺の人生すべて否定しよう。

痛いよ、すごく・・・痛いです。

俺は左頬と頭を摩りながら倒れていった。

俺は何も悪くないと思いつながら

俺は気づいたら街の都市街トロイメライにいた。人もたくさんいた。

雑音が聞こえる。

音はノイズのように聞こえる。

だがそれを聞くことはできなかった。だってノイズだから。

音が聞こえたと思ったたら足が動かなくなっていた。

凍って動かなくなっていく。

白い霧が俺の足を包み込み足を凍らせようとする。

でも遅かった。足は完全に凍り、動かすことがまったく出来なくなっていた。

俺は何でこんなことになっているのか、理解できなかった。

「助けてくれっ。助けてくれっ」

俺はそう叫び助けを呼ぼうとした。吐く息は白くこの寒さが痛く感じていた。

俺はこんなに叫んでいるのに誰も助けに来てくれなかった。

「おい、おじさん助けてくれ！」

俺は目の前にいる中年の男性に助けを求めた。

しかし男性は一瞬俺に視線を向けたが、すぐに走り去ってしまった。

「おばさん助けてください」

きつと言葉が悪かったんだと、今度は言葉を変えてみる。

おばさんもこちらをちらっとは見たのだが助けてはくれなかった。なぜだ、なぜ誰も助けてくれない。

「誰でもいい！ 俺を助けてくれ！！」

俺は腹の底から力を振り絞るように大声を出した。
すると光の先から手が見えた。

俺は迷わずその手を掴んだ。

その手は小さく、でも、暖かった。

その手を掴むと足の氷は溶けていき、俺は動くことが出来た。

こんなに暖かい手の持ち主は誰なのかと思いその手の持ち主に視線を移した。

視線の先にあったものはその手の持ち主が凍り付いていた氷のオブリエだった。

第九話〜人間と少女の出会い〜

俺はふと目を開けると目の前には天井が見えた。

どうやら俺はあのまま気を失い倒れて眠ってしまったらしい。

ということとはさっきの夢か？

俺はむくつと体制を起こした。

俺の体には長年使い続けて毛がぼろぼろになった毛布がかけてあった。

きつと誰かがかけてくれたんだろう。

俺の部屋には俺以外誰もいなかった。バンシーとさくらの姿は見えなかった。

「・・・つつ」

頭の痛みはそれほど感じなくなっていたが、まだ左頬がじんじんと痛む。

相変わらずの上手なビンタだった。

俺が左頬を摩っていると部屋の扉が半分開き、扉の間からソフィーの顔が見えた。

「あ、真くん。起きたの？」

「ソフィーか？」

ソフィーは半分開いた扉を足で蹴り、扉を開けた。

「行儀悪いぞ」

「別にいいじゃない。これ持ってきたんだから」

と、ソフィーの手にはお盆に乗せられた食事だった。

「さっき飯食ったぞ」

「もうお昼だよ」

「嘘」

俺が時計を見ると針は頂点を指し示していた。

どうやら本格的に寝ていたらしい。

「じゃ、これどこ置くの？」

「いやいい。下で食うから」

そう言い俺はソフィーからお盆を受け取り階段を下りていこうとする。ソフィーが俺の肩を掴み、俺を引き止めた。

俺はソフィーの方を振り向きソフィーに訊いた。

「何だよ？」

ソフィーは右手で自分の右頬をぽりぽりと搔きながら言いにくそうにこう答えた。

「あの・・・さ、真くん。」

「学校は？」

「ん、学校？ 学校・・・」

俺は寝起きの頭を必死に回転させ、何かを思い出そうとした。そして・・・思い出した。

俺は急いで一階に降りてみた。

そこにさくらの姿はなく、バンシーひとりで床に座ってテレビを見ているだけだった。

「さ、さくらは？」

バンシーは俺の声に顔だけこちらに向け、またテレビに視線を戻しながらこう言った。

「どっか行っただけど？」

俺は人間が上げられるであろう限界の奇声を上げながら階段を昇っていった。

部屋の扉を力いっぱい開けて急いで服を着替え始めた。

「や、やばい・・・」

「何がやばいの真くん？」

俺は窓の近くにかけてあった白いYシャツ上に冬の日に学校に行くための蒼いブレザーを羽織り、蒼いズボンを手に取った。

まあ、物事そんなに上手くいくわけもなく。

ズボンに足を取られ、壁に頭を思い切り打ち付けた。

轟音が部屋中に響いた。かなり痛い音だった。

「あ、ごめん。話かけないよ・・・」

「そう・・・して・・・くれるか？」

俺は急いで体制を立て直しズボン穿いた。

そして机に置いてあった黒い鞆を取り、どたどたという音を出しながら階段を降りていった。

「じゃ、俺学校に行ってくるからな！」

バンシーはテレビを見ながら左手を上げ、

「いつてらっしゃい」

そう返した。

俺は急いで家を飛び出した。

もう時間は昼なので学生の姿などほとんど見えない。

「完全に遅刻だな、こりゃ」

俺はそう言いながらも、学校の方へと懸命に走り続けている。

息は切れ切れで荒くなってきた。

走っていると金属に何かを打ち付けるような轟音が聞こえてきた。

一体なんだと俺は辺りを探し始めた。

そして少し道を外れ、暗い路地の脇にその音の原因はあった。

何度も何度も鉄格子に頭を打ち付けられる少女がいた。

少女を鉄格子に打ち付けていたの頬に大きな傷のあるガラの悪そ

うな30代くらいの男だった。

「何してんだ！」

俺の声に男はこちらを黒いサングラスをかけた瞳でぎろつと睨んできた。

しかし俺の姿を確認するとまた、少女を鉄格子に打ちつけ始めた。

少女はその白い髪を血で赤く染め、白い肌も赤くなって見るからにぼろぼろだった。

「止める！」

俺がそう言っても男は少女を傷つけるのをやめようとしなない。

「止めろって言うてんだろ！」

俺は鞆を投げ捨て男の手から少女の頭から離させた。

男の手から逃れることの出来た少女は光のない赤い瞳で俺の方を向いた。

俺は少女の元に駆け寄り、少女の頭を優しく摩った。

「大丈夫か？」

少女は聞こえるか聞こえないかわからないほどの弱弱しい声でこ
う言った。

「・・・た、助けて・・・ください・・・」

「ああ、大丈夫だから・・・な」

少女はそれだけを言つと気を失い崩れ落ちた。

第十話 人間と男の対決Ⅰ

「何でこんなことしやがった？」

「・・・」

俺の問いに男は黙ったままだ。

彼女に非があるとしてもこれはあまりにもおかしい。

彼女はもうぼろぼろで死んでいたかもしれない。

俺は今度は声を凄めて訊いた。

「何でこんなことしやがった？ 何とか言えよこの雑魚虫野郎」

「・・・」

男はあくまで俺の言葉に耳を傾けるつもりはないらしい。まるで糠に釘だ。何の反応もない。

だったらもう答えはひとつしかない。

俺は握れるだけの、出せるだけの力をこの右こぶしに溜めた。

そして風が音を切りその怒りのこぶしを男に向かい、真っ直ぐぶつけようとこぶしを振りぬいた。

こぶしは真っ直ぐ男に向かったのだが、男はゆっくりと顔を右に傾けこぶしを避けた。

こぶしは男の頬を掠めただけに終わった。

しかし掠めたこぶしが男のサングラスに当たり、サングラスは男の顔からずり落ちていった。

それは男を人間と見ることが出来る唯一の砦だった。

男が人間でないとする理由はひとつ

「な・・・なに・・・？」

俺は今、情けない声を出していると思う。

でもしようがないと思ってしまうのもまた自分だ。

男のサングラスの下には何もなかった。そこにあるべきものでさえ
え

目があるべき筈の部分にはぼつかりと空虚に開いた小さな穴が2

つあった。

俺は油断した。

俺が固まっているところに男の豪腕がうねりをあげ俺の顔に真っ直ぐ振り落とされた。

骨の軋む音が聞こえそうなほどの力で俺は殴られ、俺の体は少し浮き、体ごと吹っ飛ばされた。

「ぐはあ！」

背中を壁に思い切り打ちつけ鈍い音が発せられる。

口の中に鉄の味が広がっていく。

俺は口の中の血を自分の唾と一緒に吐き捨てる。

「へっ・・雑魚虫のくせにやるじゃねえかよ。」

けどな、俺はお前を許すわけにはいかねえんだよ」

右手で口の周りについた血を荒々しく拭う。

この血を見て俺は何かを思い出す。

前にもこんなことがあった気がするって。

でも今はそんなことどうでもいい。今はただ、この雑魚虫を叩きつぶすことしか考えていない。

俺は作戦とかそんなのも考えるのを止めて、ただ、地を蹴り男に飛び掛っていった。

俺は何度もこぶしを振るう。

それを男は、小刻みに動くヤジロベエみたいな簡単な動きで次々にかわしていく。

俺が疲れたところに男はその豪腕を振るう。

俺はそれを避けきれずにサンドバックのようにこぶしを受ける。

「ぐう！かはあ！ぐはあ！」

今度は地面に体を打ちつけ鈍い音を発する。

もう体を動かす力はないと思う。

あつたとしても体がそれをさせてくれないだろう。

筋一本でも動かそうとすると骨が軋むように痛む。

男は動けない俺を持ち上げた。とどめをさす気だろう。

男のこぶしは今まで以上に振り上げられ、こぶしに力を溜める時
間は今まで以上に長い。

体が動かせたら、それは大きな隙で反撃するんだろう。

俺が動けないことをこいつは分かっている。

ちっと心の中で俺舌打ちをし、俺は目をつむった。

第十一話　人間と男の対決Ⅰ

もう終わりかと思った。

とどめをさされると思った。

死ぬ前の時間というのは刹那に感じるとても長い時間があるところか
ここで聞いたことがある。

それを俺は今、体験している。

「！」

男が急に聞いたこともない妙な奇声を上げ始めた。

俺の頭が男の腕から開放され、俺は地面に尻餅をついた。

俺は何事かと思い、ゆっくりと目を開けた。

目の前に広がる光景は信じられないほど滑稽だった。

男の右手の周りに黒い空間が現れ男の右手を包み込んでいた。

まるで黒い空間が男の手のようだった。

それは漫画で見たことのあるような手だった。

しかし男の顔は脂汗をたらたらと滝のように流している。

そして刹那

指を鳴らす音が聞こえた。

黒い空間はその音に反応するかのようにつつくりと膨らんでいき、
もう一度音がなると今度はその黒い空間が急速に圧縮していきその
まま黒い空間と男の右手は同時に消滅した。

「な、何だ？」

男の影に隠れて見えなかったが、男の後ろに見える空に浮かんで
いたのはバンシーだった。

黒い翼をばさばさと交差させ空に浮かんでいた。

交差される翼からひらひらと黒い羽が舞い落ちる。

バンシーはゆっくりと俺の近くに降りてきた。

「大丈夫？」

あれ、低級悪魔よ」

バンシーは男に指差しながら俺に言ってきた。

「なに？」

あの男が低級悪魔だとバンシーは言った。

だったら俺みたいなちっぽけな人間ごときが勝てるわけもなかったということか。

「そういうことよ。わかったらとつと下がってなさい」

節々が悲鳴を上げているが俺はそれに構わず、体を動かした。

「く……く……」

俺はバンシーの肩を血だらけの右手で乱暴に掴むとバンシーの体をぐいつと後ろに下げた。

「何するのよ」

「下がるのはお前だ。はあ……はあ……」

俺はもう立っているのも辛い。

だけど俺の心が俺にまた、俺に力をくれた。

「真。もう立ってるのもつらいでしょ？」

無理しないでそこで見てなさいよ」

「……せえ」

「低級悪魔に人間が勝てるわけないでしょ」

「うるせえ！」

バンシーの肩が少し震えた。

恐怖による震えじゃない。この俺の声に対してだ。

大地が震え、空気が震え、この俺の声の届く範囲で生きているものすべてが震え出してしまっそう俺の声に対してだ。

「助けてくれたのは礼を言う。ありがとう。」

バンシーは俺の言葉に耳を傾けた。

「俺は、あいつを許せねえんだよ。」

女の子を傷つけたあいつを。

「これは俺の喧嘩だ。下がるのはお前の方だ」

「でも真じゃ勝てない」

俺はバンシーの言葉に乾いた笑いを漏らした。

自分でも納得しているように。

「へへ・・・だろうな。」

俺じゃ・・・勝てねえよな？ はは」

「だったらどうして？」

俺は近くに置いてあった1Mメートルくらいの長さの鉄パイプを手にとった。

ぬるぬるとした手にしつかりとは馴染まない武器だ。

でも相手は低級悪魔。

絶対素手じゃ敵わない。それを俺はさっきの殴り合いで理解出来た。

「頼まれたから・・・

助けてくれてっ！」

俺は右手に掴んだ鉄パイプを男めがけて振り下ろした。

風を切って振り下ろされた鉄パイプは人間にとっては恐ろしい凶器だ。

それが低級悪魔にどれだけ通用するのかは分からない。

骨と金属が激しくぶつかる轟音。

男は振り下ろされた鉄パイプを腕で受け止めていた。

消滅した片手とは逆の左手で男は凶器となった鉄パイプを簡単に受け止めたのだ。

子供同士でやるチャンバラごっこでやる丸めた新聞紙を受け止めるかのように。とても簡単に

「嘘・・・だろ？」

男は左手を振り上げ、鉄パイプは俺の手から離れ、地面に衝突し、激しい音を出した。

そしてがら空きとなった俺の顔に男の左手の豪腕が直撃する。

「ぐはあ・・・」

俺の体は宙に浮き、そこにまた男の一撃が綺麗に決まった。お手本みたいに見事なアッパーだった。

「真！」

バンシーが俺の元に駆け寄った。

バンシーは飛んでいる俺の体を地面に当たるぎりぎりの所で受け止めた。

「だから言ったじゃない！ 真じゃ勝てないって！」

バンシーはぼろぼろになっていて俺を見ながら叫んだ。悲痛の叫びだな。

傷に響きやがる。

「勝つ」

「え」

俺の声にバンシーはまぬけな声を漏らす。

「あいつは許しちゃだめだ。」

俺が勝つまで、俺は諦めねえ」

俺はバンシーの肩に手を置き立ち上がるつとする。

その体をバンシーが押さえつける。

もう立つなというバンシーの意思表示だ。

「もう・・・いいから・・・」

もう、立たなくて・・・いいから・・・」

でもそれはバンシーの俺に対する心配だ。

俺を心配してくれるやつがいるってのは嬉しい。

でも、いやだからこそ

「俺は・・・負けれねえよ」

俺は俺の体を止めている小さなバンシーの手を掴み、その手をどけた。

バンシーは俺を見つめ、こう呟いた。

「・・・勝ちたいの？」

俺は迷わなかった。

「・・・ああ」

俺はもう残り少ないであろう最後の力を振り絞り立ち上がった。

バンシーの手を借りながら。ゆっくりと立ち上がった。

バンシーは俺に向かい合った。

俺は虚ろな視線をバンシーに向けた。

「何だ？」

バンシーは迷い、何か言うのを躊躇っていた。

そして、何かを決めたようにその瞳に意思を込めながら俺に言った。

「真。私の魔法は無から有を作り出す力。

だから真に一番合う武器をこれから作り出すわ。

でもこれは黒曜魔石の力をまつたく借りない純粹なる魔法、とても・・・とても時間がかかる。

だから

バンシーは俺の手を掴んだ。

「30秒・・・いえ10秒。ええ10秒でいいわ。

10秒だけ時間を稼いで。10秒の間は私は集中したいから、何も手助けできないの。

だから死なないで。10秒の間、生き延びて」

俺はバンシーの手を握り返した。

「10秒だな。簡単だ」

俺はもうやつを倒すにはバンシーの力を借りるしかないと思った。だからバンシーに賭けることにした。

これはかなり分の悪い賭けだ。

賭けに負ければ死に、賭けに勝っても確実に勝てるという保障のない理不尽な賭けだった。

だけどバンシーが言うんだ。

勝てるさ。

俺は虚ろな目に光が戻るのを感じた。

光が見えてきたんだ。このまま引き下げられるかよ。

「無より有を

バンシーは何やら呪文を唱え始めた。

もうここからはバンシーは何も出来ないらしいな。

俺は10秒間、命を賭けて生き延びてみせる。

男は今度は自分から責めてきた。

男の豪腕は疲れというのを知らないらしい。

先ほどから威力がまったく変わっていない。

しかしそれはこちらにとっては好都合だった。

さつきと威力が同じなら避けるタイミングも同じってことだ。

俺は男に殴られ続け、男の攻撃にある程度のリズムがあるのをこのぼろぼろの体で覚えた。

男の豪腕を何回かに一度避けられるまでになっていた。

しかし、一発のダメージが多い上に一発男の攻撃を受けるとリズムがめちゃくちゃになり、避けるのが難しくなっていく。

まだ10秒経たねえのか。

「しまった！」

俺は一瞬、男から目を離してしまいもろに男の豪腕の一撃を食らってしまった。

昔遊びでやった椅子の上に座り、椅子を何十回というほど回転させ、そのまま立ち上がったときみたいに頭がくらくらする。体がふらふらする。

「出来た！ 真！」

受け取って！」

バンシーは何かを俺の方に投げてきた。

俺はそれを何とか受け取った。

そこにあっただのは忌々しい、俺の過去に使ったことあるものだった。

第十二話　人間と男の対決ⅠⅠⅠ

バンシーから受け取った“それ”は黒く怪しい光を帯びていた。小切先から伸びた横手、物打、刃先、峯、しのぎ、刃区、柄、そして刃渡り

俺はこれを知っている。同じだ。

この柄の握り具合・・・間違いない。

これは俺の木刀だ。

俺が逃げ続けたあの木刀と同じだった。

俺の掴んでいた柄の部分にぼんやりと文字が浮かんできた。

“畢竟無”^{ひつきよむ}と

過去にも未来にも何もないという意味だ。

俺には何もないとお前は言うのか？ そうなのか？ 畢竟無。

「ないなら作るだけだ。だろ？」

今は、力を貸せ。あいつを倒す力をよ」

俺は右頭部に畢竟無を構えた。とんぼの構え。

その構えから畢竟無を男のいる方へと90度傾ける。これは俺が

昔やっていた剣術を俺なりにアレンジした自己流だ。

右手で畢竟無を持ち、左手は格闘が出来るように構えた。

石を蹴り、俺は男の方へと飛び掛った。

自分でさえ驚いた。

羽のように体が軽かった。

これが悪魔の作り出した刀の力なのか？

左手の掌で男の視界を覆い、男の動きをある程度封じた。

男の目はないかと思っていたがその空虚に開いた穴が男にとっての

目だったらしい。

男は俺の左手を振り払う。

作戦通り。

男に十分な隙が出来た。

俺はそこを逃さなかった。

畢竟無を握り、流れに任せ、風の通り道をなぞるように畢竟無を振り下ろした。

風と肉を斬る音が俺の耳元で聞こえた。

「！」

男は奇声を上げた。

先ほどまでの打撃はまったく効かなかったが、この畢竟無の一撃はかなり効いたらしい。

俺は怯むことなく、何度も畢竟無を振るった。

一閃、二閃、三閃

一閃振るうたびに、肉と風を斬る音が聞こえる。

男も反撃をしてきたが、軽くなった体は男の豪腕を完全に見切っている。

大振りの攻撃はもう簡単に避けられるようになった。

「勝ったわね」

バンシーの勝敗を予測する声が聞こえた。

俺はこいつに負ける気がしなかった。

畢竟無の黒く怪しい光が強まった。

俺は止めと、畢竟無を上段に構え、男に対し振り下ろした。

黒く光る刃が男を貫き、地面に焦げ後を残す。

男がふたつに分かれ、黒い刃と共に消滅した。

「終わった・・・」

畢竟無が俺の手から滑り落ちる。

滑り落ちた畢竟無は物を切るような音を出し、地面に刺さった。

俺は少女のいたところに駆け出した。

少女のいたところに駆け寄ったはずなのだが少女の姿は見えなかった。

「ぐっ・・・」

危機を脱し、安心したのか急に体が痛みだした。

俺はもう立つ気が起きなかった。

このまま眠ってもいいと思った。深く、暗い闇に身を置いてもいいと思った。

俺は顔から倒れていった。

その体をバンシーが支えてくれた。

「もう休んでいいよ」

「悪いな・・・じゃ・・・すこ・・・し・・・だ・・・け・・・」

俺はそこで意識を失った。

バンシーが何かを呟いたのだが聞く気力もなかった。

「真。よくやったね。」

変わってない・・・ね。

真は・・・真だったよ。

よかった」

第十三話 悪魔の治療は禁忌

虚ろとした意識の中で初めて聞いた音は蝉の鳴き声だった。

ぼんやりと目を開けると天井が見え、ここが俺の部屋だということと今日の季節が夏だということが分かった。

体を起こそうとすると昨日の喧嘩で受けた傷が鈍痛と俺の体を無邪気に走る。

俺の体には絆創膏やら包帯が巻いてあった。

バンシーがしてくれたのだろうか？

俺は昨日の出来事をゆっくりと思い出す。

そしてあの少女のことを思い出す。

綺麗な白髪が血で真っ赤に染まり、俺に助けを請いたあの少女のことを。

俺が考え事をしていると部屋の向こう側からどたとと激しい足音が近づいてくるのがわかった。

部屋の扉を俺の許可なく開いたのはソフィーだった。

「真くん！」

傷に障るような大声を出しながら俺のベッドに飛び込んできた。

「ぐは！」

ソフィーの体が俺の傷に押し掛かり、その激痛に俺は堪らず声を漏らした。

「あ、ごめん」

謝りながら俺の体から素直に降りてくれた。

あはは、と苦笑いをして誤魔化すように話しかけてきた。

「でも心配したよ真くん。」

真くん大怪我してたんだもん」

今も体が痛いわけだし大怪我に違いないのだが、

「だからって人の体にダイブすることはないだろうが」

ソフィーは怪我人の体に非常に効果的なアタックをしてきたわけ

で、傷が開いてもおかしくなかった。

「う、ごめん」

そう言いソフィーは頭を下げる。

俺は言いすぎたかなと思い、少し照れくさそうにしながらソフィーの頭を撫でた。

「心配してくれたんだろ？」

「だったらありがとうだよ」

「真くん・・・」

俺は撫でている手に絆創膏がしているのを見て思い出した。

「そうだ。ソフィー」

俺の言葉にソフィーは俺を見る。

「この絆創膏とかなんだけど、やっぱりバンシーがか？」

俺はてっきりバンシーが治療してくれたものだと思っていた。

だからソフィーが首を横に振ったときは結構驚いた。

「あ・・・それ？」

ソフィーは何か言にくそうだ。

「どうした？」

ソフィーはあははと笑いながらこう言った。

「あはは・・・それ・・・僕なんだ。治療したの。

びっくりした？ 痛いところとかない？」

「いや・・・特にないけど・・・」

バンシーが治療したんじゃないやなくてソフィーがか。

何で違和感を感じるんだろうか。

バンシーが俺の体の治療をしなかったくらいで。そんなの気にする必要なんてないはずなのに。

「真くん！」

俺が考えているとソフィーが急に大声を出したものだから俺は驚き少しびくつとしてしまった。

「バンシーのこと嫌わないで・・・」

少し秘めた言葉が俺の耳に届く。

その声に俺は素っ頓狂な声を思わず出してしまつ。

「へ？」

「バンシーは悪くないの。悪いのは・・・多分^{ルール}掟の方だから」
「掟？」

ソフィーの悲しげな瞳を見て、俺はソフィーの言葉に手をひらひらと振りながらこう返した。

「当たり前だろ？」

俺がバンシーを嫌う？ ないって。だから安心しろ

ソフィーは俺の言葉に頷く。

「ありがとう。」

真くんには教えておくわね

「何を」

「悪魔と天使の掟^{ルール}のひとつ。

治療について」

この怪我とかに関する事なのだろうか？

何かあるというのだろうか？ 悪魔と天使の掟^{ルール}に

「僕は天使で、バンシーは悪魔だよね」

「ああ」

俺はソフィーの問いに頷く。

「悪魔はだめなんだ・・・」

「何が？」

「命あるものに対する治療」

「は？」

また素っ頓狂な声を出してしまった。

「植物、生き物、そして人。」

これに対して治療を行っているのは植物、生き物、人、そして天使だけなんだ

「ちよ、ちよっと待ってくれ」

俺はつらつらと言葉を続けるソフィーの言葉を遮るように言葉を被せる。

俺は今まで聞いた話をまとめるように顔に手を当て、考え始めた。「じゃあ、天使は人間に治療を行ってもいいけど、悪魔はだめってことなのか？」

俺はソフィーの言った言葉をオウム返しで返す。

ソフィーは黙って頷く。肯定という意味だろう。

「わけわかんねえ。何だその掟」

「分かんないよ・・・そんなの・・・」

ソフィーは悲しそうに俯く。

「昔はバンシーも掟じゆんに縛られてなかったんだよ。

でも少し前から急に掟じゆんに従うようになっていったんだ。

いや・・・もうあれは従うっていうより従順になってる。

何かを恐れて」

俺はどう声をかけていいものか悩んだ。

俺はこんなにソフィーが悲しそうな顔をするとは思わなかったから。
ら。

でもひとつ分かったことがある。

「ソフィーはバンシーのことが好きなんだな。

そんなに悲しそうな顔してるんだし」

俺の言葉にソフィーは頷いた。

「うん、好きだよ」

俺の言葉に素直に頷いたソフィーは恋をするただの12歳くらいに見える少女だった。

顔を少し赤らめるソフィーはつい愛でたくなるほど愛らしかった。

第十四話 転校してきた白髪の少女

俺はこのまま眠っているのもどうかと思い学校に来ていく服を着て、ソフィーと一緒に一階に降りた。

一階には誰もおらずバンシーの姿も見えなかった。

「あれ？ バンシーは？」

「ああ。バンシーなら今いないよ」

「どこ行ったんだ？」

俺がソフィーにそう聞くとソフィーはくるりと俺の方へと振り向きひまわりのような笑顔を浮かべながらこう言った。

「大丈夫。」

真くんは心配しないで

「え？」

ソフィーの言葉に俺は反射的に声を漏らした。

「大天使さまは僕たちで探すから。」

真くんは見守っててね

それだけを言うとソフィーはまたそっぽを向いた。

俺はソフィーに声を掛けようと思ったが声を掛けるのをやめた。

俺は非日常に身を置いていたはずなのに。

こいつらが心配で仕方なかった。だから声を掛けるべきだったのに。

手を伸ばせば届く距離だが、今の俺にはすごく遠かった。

そう、人間と天使の距離。

いると信じ、それを崇拜する。

だが本当はいない。だからそれは意味のない崇拜なんだ。

ここにいないはずの天使にすら触れることの出来ない距離だった。

「真くん。急がないとまた遅刻しちゃうよ」

ソフィーはリビングに掛けてあった時計に指差す。

「やばい！ じゃ、俺行くから」

「うん。いつてらっしやい」

俺は慌てて家を出て行った。

出て行きながら俺はバンシーの言葉を思い出す。

『考えても仕方ないわよ。今は大天使さまをさっさと探すことだけを考えればいいの。』

それからごちゃごちゃ考えなさいよ』

今は大天使のことを考えよう。

そう言い訳しながら俺は学校へと向かった。

この街には学園トロイメソイはひとつしか存在しない。

この“シネラリア学園”のみだ。

この学園は小等部。中等部。高等部。大学院。それぞれこの学園内にある。

高等部まではエスカレーター式で進めるのだが、大学院だけはその資格があるかを試験し、合格しなければ入ることは出来ない。

まあ俺には関係のない場所だろう。

俺は知識並。知恵も並。良くもなく悪くもないんだからな。

俺は教室に來ると窓際が一番後ろの自分の席に座った。

ふつと少し息を整え、走ってきた疲れを取る。

俺が机に突っ伏し、ふと前を見るとじと目で俺を凝視している人物がひとり。

すこし離れた席でこちらを見ていたのはさくらだった。

さくらは俺の視線に気づいたのか閉じていた本を開き本に目を通し始めた。

そういえば俺、さくらに叩かれたんだっけ？

アレは俺が悪いのか？

そんな疑問がひたすら脳裏に浮かぶ。

が、このまま引きずるのもめんどくさいし、俺は椅子から立ち上がり、ぼさぼさと頭を掻きながらさくらに近づいていった。

さくらの前まで来ると何を話すべきかわからなくなった。

でもこのまま沈黙の空気が流れるのも耐え切れなかったから、と
りあえずさくらに声を掛けることにした。

「あ、あのさ・・・」

さくらは本を黙々と読んでいる。

俺の声聞いているよな？

「ご、ごめんなさい・・・」

小動物の鳴き声のように小さな声が聞こえた。

「え？」

「真ちゃん。ごめんなさい」

今度ははっきり聞こえた。

この声の正体はさくらの声だった。

さくらは本に槩を挿み、その青い目をこちらに向けてきた。

「いや、別に・・・いいけど・・・」

「うん。ありがと・・・」

さくらは安心したように微笑む。

俺はその笑顔に安心する。

優しいさくらの顔に戻ってくれたと思ったからだ。

「もう1回言ってくれないか？ ごめんなさいって」

「え、あ、うん。」

「ごめんなさい・・・」

「・・・いい」

「何してる？」

俺の声の振りをして、さくらに命令していたのはこの男だ。

「この・・・『ごめんなさい・・・』いいでー！

最高やー！」

「何してんだって言ってんだろっが！」

緑色の明るい髪。ショートカットのその髪はぼさぼさで手入れが
まったくされていない。

その緑色の瞳によく合う緑を縁取っためがねをかけた男。

「話を聞け！ 遙山はるやま和也！」

俺の後ろに背後霊のごとく気配を殺し立っていた。

「なんやおったんか？」

「おったんか？ ってお前今俺の声真似てたじゃねーかよ」

こいつの特技はあらゆる人物の声を即座に真似られること。

聞いた事のある声なら男だろうと女だろうと関係なく真似ることが出来る。

「フジもつれんなー。また夫婦喧嘩して？

かーもう悔しくてしゃーないわ」

「だから俺の名前は藤堂！ 藤堂真！」

フジなんて文字は一文字もない！ いい加減覚えろ！」

こいつとは切っても切っても切れない腐れ縁。

なのにこいつは俺のことをフジだと呼ぶ。

俺が何度も藤堂と言っているのにも構わずに。

「藤の字を別の言い方したらフジやる？」

せやからフジでええんや」

と、どこか偉そうに言い訳をする和也。

こいつの腹に一発こぶしを入れてやった。

文句あるまい・・・

大げさに腹を押さえている和也。

「お、大げさ・・・ちやうわ・・・

ほ、本気で入れんなや・・・」

「顔じゃないだけありがたく思え」

「はあ・・・ったく、昨日お前が休んでさくらはえらい心配してたんやでっ？」

さくらが俺の右頬にあった傷を指でなぞった。

少しひんやりとしたさくらの指が震えていた気がした。

「ど、どうした？ さくら？」

さくらは心配そうな顔をして俺に尋ねてきた。

「真ちゃん・・・この怪我は？」

「え・・・？」

「あ、ああ・・・えっと・・・」

どう言おうか悩んでいると和也がぼんっと肩に手を置いた。

「ま、ええわ。」

そんなことよりもや。知っとるか？」

和也は俺が困っているのに気づいて話を逸らしてくれたのだろうか？

俺はそれに合わせるように和也の話に言葉を返した。

「まあ、うわさだけなら知ってるが。よくは知らん」

和也は内ポケットに忍ばせていた手帳を取り出しぺらぺらと何枚かページをめくりそこに書かれていることを読み出した。

「俺の知っている情報では、なんと転校生はこのクラスに来るらしい」

「へえーそうなのか？」

和也は大きく頷いた。

「ああ。」

しかもなんと女。それもなんと・・・」

和也はもったいぶるように言葉を濁す。

「何だよ？」

和也は肩をそびやかし声が学園中に響くのではないかというくらいの大声でこう叫んだ。

「美少女らしいでー！」

「・・・はあ」

俺の呆気ない返事に和也は息がかかるのではないかという程の距離まで顔を近づけてきた。

「お前は・・・正気か？」

「顔が近い」

俺が和也をぐいっと和也の顔を遠ざける。

和也はそれに怯むことなく言葉を続けた。

両手を天に向け、どこかの独裁者のような演説を始めた。

「ええか？

ただの少女ちゃんやぞ！ 美少女や！ 美・美・美！

この一文字がつく少女は限りなく少数。これは分かるな？ 分かんらん？ 分かれっ！ この愚か者が！」

俺、愚か者？

息もつかせぬように和也は和也の頭の中に描く美少女という条件をぺらぺらと話し始める。

俺はもうこいつの話を聞くのが嫌になってきた。

こいつの美少女談義は耳にタコが出来るほど聞かされている。

「つまりや、美少女と言うのはやな・・・」

こいつの次の言葉はもう分かっている。

こいつの十八番おはの台詞だからな。

「美少女は正義や！」

天に届けたいのだろうか、その言葉は？

この満足そうな顔はまさに、天にも昇りそつだ。そのまま昇ってどっか行ってくれ。

リズムカルな電子音が聞こえる。

俺はやれやれと肩を落としながら自分の席まで戻った。

電子音が鳴ってから数十秒後に担任の教師が入ってきた。

教師は教壇に立ちいつものようにお決まりの言葉を言った。

「委員長号令」

「起立」

クラスにさくらの声が響く。

さくらの言う通りにクラスの全員が立ち上がる。

「礼」

全員で教師に頭を下げ、学園での一日が始まる。

「今日は転校生が来る。

入りなさい」

担任の言葉に耳を傾ける者。どんな転校生が来るのかわくわくしている者。不貞寝している者。

扉が開かれ、その多数だった者たちの視線を奪ったのは和也の言う通り　いや、それ以上の美少女だった。

かく言う俺も入ってきた少女に目を奪われた。ふわりとした風が少女の髪をなびかせる。その風に少女の髪は抗うこともせず、風に思うままにさらりとなびいた。その背中を覆うほどの長い白髪はよく手入れがされていて同姓でも触りたそうに少女の髪を見つめている。

その華奢な体には似合わないほどの女性特有の肉付き。付きすぎてもおらず、無くもない。女性が望む究極の女の体をしていた。

少女はそのルビーのように透き通った赤い瞳でクラスを眺める。その瞳は人を一瞬で恋させるほどの魅力があった。

そしてほんわかとした優しい雰囲気を持つ彼女は野に咲く一輪の花のような強い意思を感じる事が出来る。おとなしそうな印象と共にどこか意思の固い強い女の子にも見えた。

「自己紹介を」

担任の言葉に少女は澄み切った声を発した。

「はじめまして。氷上こおりがみあい愛彩あいです」

第十五話　少女の赤い瞳

氷上愛彩と名乗った少女はクラス中の男をその言葉通りに魅了した。

一目ぼれしているやつも中にはいるかもしれない。

「近所から引越してきました。」

よ、よろしくお願いします」

ぺこりと氷上が頭を下げ、再び顔を上げるときつと氷上の目には無数のけだものに映っていたであろうクラスの男たちの顔があった。

「近所つてどこ？」

「えっと・・・」

「今、どこに住んでるの？」

「学園寮に」

「彼氏とかは？」

「そういう人はあいにく・・・」

彼女は律儀にも答えなくて絶対いいであろう質問にさえ答えていた。

「おほん」

担任のわざとらしい咳でさえ、けだものと化した男たちには聞こえていない。

きつと和也もあの中にいるであろうと和也の席をちらつと見たが和也はあの氷上を見つめているだけで、けだものと化していない。

「やかましい！」

クラスに担任の大声が響いた。

さすがにその大声はクラスの男どもを黙らせることが出来た。

「じゃあ、氷上は藤堂の隣へ」

「はい」

えーとかふざげんなとかダンスに足の小指ぶつけて死ねとか色々聞こえてきたが俺はそれを無視した。

俺の隣まで氷上が来た。

俺は一応挨拶することにした。

普通でいいよな？ な？

「よろしく」

「はい。よろしくおね・・・」

おね？

おねって何だ？

俺が何のことか聞こうと思えば氷上の方を見ると氷上はじっと俺の顔を見ていた。

「な、何だ？

顔に何か付いてるか？」

氷上は言っていていいものかと悩み、それを言えずにいた。

俺はそのことに気づき、俺が質問することによって氷上が言いやすいようにした。

「どうした？」

すうつと息を吸い、呼吸を整える氷上。

そして俺にこう尋ねてきた。

「あの、間違ってたらごめんなさい。

もしかして・・・昨日の人ですか？」

そう言われ俺はじっと氷上の顔を見る。

確かに見たことがあるような気がしないわけではないが、はつきりと誰というのは分からない。

昨日俺が会った子はあの低級悪魔に傷つけられていた女の子だけなわけだし。

ぼんやりと氷上の目を見ていてふと何かを思い出す。

この赤い目に見覚えがあると。

昨日の女の子の目は光の届かない影に満ちた目。

氷上の目はその影の目に光を差した瞳みただった。

「もしかして・・・あのときの・・・？」

俺がそう聞くと氷上は軽く頷く。

「はい・・・」

そのときの氷上の顔は本当に悲しそうだった。
俺はその顔に何も言えず本当に情けなかった。

第十六話 人間の言葉の矛盾

これから授業ということもあり、昨日の話は昼にふたりきりで話すことにした。

俺もなぜ氷上があんなことになっていたのか少し気になるし。

氷上は授業が終わった合間などにまた質問攻めに遭いそれを律儀に全て答えていた。

そして何の変化もなく昼になった。

俺と氷上は教室を抜け出し屋上へ向かった。

屋上は生徒立ち入り禁止なので人もあまりいない。

ここで昨日のことを話すことにした。

俺は何から話そうかと悩んだ。

だがやはり一番の気になったことを最初に聞こう。それが一番妥当だろう。

「氷上は何であんなことになってたんだ？」

俺がそう聞くと氷上は首を横に振った。

「え？ 分からないのか？」

「はい。」

急に後ろから腕を掴まれて、あそこに連れられて・・・」

「そうか・・・」

話を聞くかぎり、氷上に非があるわけではない。

ということとは低級悪魔は無差別に人を襲うのか？

だったらそんな危ないやつらを野放しにしておくわけにもいかないな。

だが俺に一体何が出来る？

あの時はバンシーがいたからあの男に勝てたんだ。

あの男は鉄パイプを振りかざしてもまるで効いてなかった。

俺がひとり喉を唸っていると、

「あ……」

氷上の細い声が聞こえた。

俺ははっとして氷上の顔を見上げた。

「何だ？」

氷上は俺から視線だけずらし、もう一度視線を俺に合わせるなどと落ち着かない感じだった。

俺は氷上の言葉を黙って待った。

そして決心が付いたのか氷上は俺にこう尋ねてきた。

「藤堂さんはどうして私のこと助けてくれたんですか？」

俺はその質問にどう答えようか悩んだ。

はつきり言ってはつきりとした理由^{わけ}なんてなかった。

俺は昔からこうだ。

女の子がいじめられてたら、女の子をいじめているやつがどんな大男だろうと、どんな悪がきだろうとつい手が出る。

さくらが言うには俺は頭に血が上りやすいんだそうだ。

さくらも昔はいじめられていて、いつも俺が助けていた。

和也が言うにはそれが普通だと。

和也も俺と同じ人種らしく、手が出るらしい。

まあ、あいつはそうだろうな。

……伊織^{いおり}が死んでからは……特に……な。

「理由^{わけ}はあんまない。」

助けてって言っただろ？ だからってのはだめか？」

俺がそう言う^{いう}と氷上は悲しそうに俯いた。

俺は慌てて氷上の様子を伺う。

「ど、どうしたんだよ？」

「……い」

氷上は何かを呟いた。

「え？」

俺は声を聞き取れずに聞き返す。

「……ごめんなさい」

今度ははつきりと聞こえた。

氷上は悲しそうな顔でごめんなさいと言ったんだ。

「な、何で謝るんだよ？」

「だって・・・私があなたに助けを求めたから・・・

あなたは私を助けないといけなくなつて。

「こんなに・・・怪我をして・・・」

そう言い氷上は絆創膏の貼つてあるところを掠めるように指でなぞつた。

「あ、いや、別にそういうわけじゃ！」

お前が悪いわけじゃないだろ？ な？」

「でも・・・」

氷上の顔がどんどん暗くなつていくのが分かる。

似てたから。

誰に似てるのかは分からない。でもこういつ時どうすればいいのかは分かる。

俺は顔がどんどん沈んでいる氷上の両肩をがしつと男同士で握手をするときみたいに強く掴んだ。

「・・・愛彩！ お前は悪くない！ 悪いのは全部あの男！」

お前が気にするっていうなら俺はお前を赦さない。

お前は気にするな！ な！」

「でも・・・」

こう返つてくるのもなんとなく分かつてた。

多分人生で二度目

もう一度言おうか。

俺は氷上の目をじつと見た。

目を逸らした氷上の目に合うように俺が動く。

俺は氷上から目を離さないようにした。

「そのことを気にしないってことが無理なら気にしないことを気にするな。」

いいな」

矛盾している言葉かもしれない。

でも過去は変わらない。

いくら懺悔しようとも。

だったら気にしない方がいい。

気にしないで忘れてくれるわけじゃない。

気にしないだけだ。

「でも・・・」

それでも氷上はやはり気になるようだ。

これはもう性格だろう。

「お前は悪くない。それでいいじゃないか？

お前は悪人になりたいのか？」

俺はそつと氷上の頭に手を乗せる。

髪の毛の柔らかい感触が左手の掌てのひら一杯に伝わった。

そしてくしゃくしゃと髪を掻き毟った。

「な、何をするんですか!？」

当然、氷上は俺から一歩離れ乱された髪をどこに入っていたのだ

ろつか、櫛で髪を梳かし始めた。

俺はにやりと笑い、

「これであいこな？」

お前は俺に助けられて貸しが出来た。

そして俺はお前にひどいことをしてその貸しをぶち壊した。

だからお前が気にする必要はもうないわけだ・・・な？」

「え」

腹の鳴る音が聞こえた。

音の発生源は俺の腹だ。

今日は朝から何も食っていない気がする。

・・・っていつか食ってない。

ふうとため息が聞こえた。

顔を上げると、軽いため息をつく氷上の顔があった。

「わかりました・・・もう気にしません」

「そうか・・・」

「でも・・・」

氷上は少し悪戯っぽく笑った。

「あなたから髪を乱されて、あなたに貸しができてしまいました」

「え？ マジ？」

「はい。マジです。」

だから返してもらおうかと・・・」

まさかこんなことになるとは思わなかった。

一体何をすれば許してくれるのだろう。

俺は息を呑み、氷上の言葉を待った。

「私もあなたのこと真さんって呼びますから、真さんは私のこと愛彩って呼んでください」

以外と大したことのない頼みで驚いたが、それが氷上の望みならと、確認するように呟いた。

「愛彩・・・か」

「愛彩です。真さん」

第十七話　右こぶしと左こぶしと契約

何だか妙な雰囲気になりだしたのだが、その雰囲気が崩されるのは以外にも早かった。その原因となったのが決められた定時に毎回なる電子音だった。

「お、そろそろ戻らないとな、じゃ・・行こうか愛彩」

「そうですね」

名前を呼び捨てにしあうのは様は慣れの問題。ここまで違和感が少なく愛彩の名前を愛彩と呼べたのはなぜなのだろうか？　俺に何か愛彩に対する特別な感情があったということなのだろうか？

それはそれで悪くはないと思う。でも、どうしてだろう。愛彩が俺のことを真さんと呼んだとき、俺は少し感情が高ぶるのを感じた。それは心地よくて、ドキドキして、胸を締め付けられるような感覚だった。

まるで恋をしたようだった。一世に一度出来るかどうかの大きな恋を

俺たちが戻った頃には授業は始まっていて、教師にこっ酷く怒られている中、俺はクラスの男どもの突き刺す・・いや、刺し殺すほどの殺意の満ちた視線を浴びせられていた。その中にはさくらの視線も混ざっていた。

授業が終わり、次の授業が終わるまでの少しだけの短い休み時間のときにそのことを尋ねても『知らないっ！』と一蹴するだけで俺の話を聞く雰囲気さえ感じさせてくれなかった。また、俺何かしたっけか？　うーん、分からん。

「そんなわけがないだろう？　我が永遠の友ザ、フジよ」

何か嫌な声が耳元から聞こえるが、きつと気のせいだから無視しよう。うん、そうしよう。

「おい、聞いたんのかー？ はははっ、そんなわけがないであろう。フジも気が付いているのであろう。なあフジ。大事なことから思わず2回言ってしまったぞ」

「次の授業は国語・・・か。用意しないとな」

「・・・そう来んねんな・・・」

「・・・お、せや」

後ろで何回かの咳き込みの音が聞こえた。それでも俺は無視を続けた。

「・・・藤堂くん」

後ろから愛彩の声が聞こえた。

俺は思わず振り返る。

そこにあつたのは憎たらしくにまりと笑う和也の顔があつた。

「藤堂くん。私のこと好き・・・なんだよね・・・さくらさんと私・・・どっちが好き？」

こいつの特技・・・声真似だつた。

「え、私！ くすくす・・・じゃ、・・・両思い・・・だねっ」

いつまでも愛彩の声真似を止めようとしない和也。俺は右こぶしを強く握ると、そのままこぶしを天に掲げるように、和也の顎に入るように右アッパーを入れた。

「どぐふぁー！」

和也の体が宙に浮き、そのまま天井に突き刺さつた。

「そのまま反省してろ」

「酷いではないか？ フジが俺の話を聞かんのが悪いやろが」

和也の顔は驚くほど無傷だつた。

はあと俺はこれ以上の無視は無理と判断し、和也の話を聞くことにした。

「で、何だよ？」

「何って決まつとるやろ？ 転校生氷上愛彩のことや。

何してたんや？ 2人きりで、や」

「別に何もしてない。ただ話をしていただけだ」

そう、ただ話をしていただけだ。ただあまり人には話せないような話をだが。

まあ話をもし誰かに聞かれたとしても、まず信じない。もしくはおかしい奴らと思われるのがオチのくだらない話だ。

「まあ、言いたくないというならそれも仕方ない。

せやけど・・・な」

和也は眼鏡に指を当て眼鏡のズレを直し、俺に向かい人差し指を顔に指しこつ言った。

「あんま、心配させんな。特に彼女、さくらや。お前の知ってるさくらの性格を考え」

俺は和也の後ろに見えるさくらの表情を伺ってみる。多少の不満の表情の中に少しだけ不安の表情が見えた。

さくらの・・・性格。自分のことになるともの凄く弱い。

でも俺に対する心配が半端じゃなかった。昔はもの凄く弱かったさくらだが、俺が一度だけ家に帰るのが遅くなったとき、さくらは街中を走り周ったそうだ。足はもの凄く痛いはずなのに、その足に自分で鞭を入れるようなことも容易くしちゃうやつだ。

もし、さくらが俺のために低級悪魔なんて化け物に道を閉ざされてしまったと考えると、俺は酷く後悔するに違いない。

さくらが無茶をしてしまう。そんなことは絶対だめだ。和也が忠告してくれなかったら、俺は何も気がつかなかっただろう。こいつは時々恐ろしく頼もしい。

「・・・そうだな。ああ」

俺は右こぶしを和也の前に掲げた。和也はこの意図に気づき、左こぶしを俺の右こぶしに衝突させる。

昔俺たちが決めた契約。これをするときは死んでも約束を守ることに。そういう約束。

「これをやったからには約束は守ってもらうで、ええな」

再度釘を刺す和也。

「ああ」

俺はその釘を心に深く刺し込んだ。二度と忘れないように

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9708c/>

悪魔と天使におまかせっ

2010年10月10日02時19分発行